

KN-
N
2

		釘本久春
	1ニ 1ニ 1ニ	ほんのほん ハワハ教育会 1968.2.1 二のん下 木1111 P.74 教師歴

★ハワ No.100
★ハワ No.1107

東京都千代田区霞が関3-2-2

文化庁文化部国語課



013
H45
(USA)

東京都千代田区霞が関3-2-2

文化庁文化部国語課



備
品

釘本久春編

につぼんごのほん

二ねん下

教師用書

ハワイ教育会

東京都千代田区霞が関3-2-2

文化庁文化部国語課

目次

○教材指導月別計画表……………	4
一、「二ねん下」の編集にあたって、指導上、留意し、 了解していただきたい事項について……………	一
二、指導の実際	
單元1 みち……………	五
ひろい みち せまい みち……………	六
はとの みち……………	九
あかい とり ことり……………	十四
單元2 よみます……………	十七
らくだの みみ……………	十九

なきごえ あそび……………三六

單元3 はるが きた……………三三

はるが きた……………三三

えはがき……………三三

單元4 はなします……………四一

いいすたあの やすみ……………四四

もりの こやぎ……………四六

單元5 れい

れいの ひ……………五〇

れいと いるか……………五三

單元6 したきりすずめ……………六一

したきりすずめ……………六三

教材指導月別計画表

3				2				月
4	3	2	1	4	3	2	1	週
3 はるが きた		2 よみます			1 みち			単 元
はるが きた	◇まとめ ◇練習問題	なきごえ あそび	らくだの みみ	◇まとめ ◇練習問題	あかい とり ことり	はどの みち	ひろい みち せまい みち	課
韻文		会話文・敬体	平叙文・敬体		韻文	平叙文・敬体	平叙文・敬体	教材・文体
24 ～ 25	22 ～ 23	18 ～ 21	14 ～ 17	12 ～ 13	10 ～ 11	6 ～ 9	4 ～ 5	ページ

5				4			
4	3	2	1	4	3	2	1
6 したきりすずめ		5 れい		4 はなします			
◇練習問題 ○まとめ したきりすずめ	◇練習問題 ○まとめ	れいのひ れいと いるか		◇練習問題 ○まとめ いいすたあの やすみ もりの こやぎ			えはがき ○まとめ ◇練習問題
平叙文・敬体		平叙文・敬体 平叙文・敬体		平叙文・敬体 韻文			平叙文・敬体
54 } 55	48 } 53	46 } 47	42 } 45 40 } 41	38 } 39 36 } 37 32 } 35			30 } 31 26 } 29

凡 例

一、指導の時期

各単元の学習指導に相当する時期と、指導に要する期間の大体を示した。

二、指導の時間数

一単元の指導に要する時間数の大体を掲げ、単元にふくまれている各課、まとめ、練習問題について、学習時間の配当が適正にたてられるための目安とした。

三、この単元の趣旨

各単元を設定した趣旨を述べて、教材が、児童の情操面、言語能力の面の、とくにどんな点の育成を目標として配列されているかを解説した。

四、学習指導の要点

教室において、実際指導にあたる場合に、その単元で重点をおくべき点——とくに語法のうえで——を指摘した。

五、学習指導の展開

教室作業の実際操作の例を掲げた。

まず、各課ごとにはじめに教科書の本文をかかげて、教案と対照して研究できるように配意した。各課ごとに、新出の文字、重要な語句、文型、文法を取り出して、本文の下に掲げ、指導の重点を明らかにした。

㊦㊧は、教室作業を進めていく順序を追って、その方法を解説し、教師が指導案を作成するための参考に供したものである。

「まとめ」は、各単元ごとに掲げられているまとめについて、そのねらいや応用の方法について解説してある。

「練習問題」では、各単元において習得すべき要点を確認し、正しく記憶し、言える訓練とするため、実際例として問題の型を示した。

一、「2年下」の編集にあたって

一、「2年下」の編集にあたって、

指導上、留意し、了解して

いただきたい事項について

一年から二年へ、学年は変わりますが、この教科書の編集方針や指導法が、「一ねん上」の教師用書に掲げたものと変わりなく、これを引き継ぎ遵奉して、その延長と展開をめざしていることは申すまでもありません。新学年にあたって、教師の方々が、この点を再確認して、各自の授業のなかに、その趣旨をじゅうぶんに生かす構想をお立てくださるよう、改めてお願いいたします。

一年上・下巻の学習を終了した生徒は、約三百五十の語句、六十の文型を習得したことになります。これに対して二年上巻に提出の語句数は約百、とくに取りあげて指導すべき文型や文法の形は二十足らずに留めてあります。

これは、二年の学年は、児童の力を先へ伸ばさせ拡大させることよりも一年で習得したものをじゅうぶんに復習させ習熟させることを主眼としたためのものです。ですから教師の方々もこの意図にそって、一年で既習の語句、文法を十二分に駆使して、生徒がその使用に馴れる

よう指導していただきたいと思います。

ことばの、このような提出の方法は、三年以降にも採用していきたいと考えているものです。すなわち、ある時期には、生徒の受容能力を超えるかと考えられる量のもので、まず一応紹介し、それを、その時その場で一気に押しつけることをせずに、機会あるごとに繰り返して提示し、徐々に消化させていく——反芻的に消化させていくという方法をとりたいと思います。少数を選んで漸進的な指導方法を、着実なものと考え方もあるでしょうが、この教科書の編集にあたってはこの方法に拠っていません。ことばは、それが実際に使われる場合は、さまざまの変化が雑然と混じり合っており、文法理論的な整然とした順序に従って、提出されるものはありません。それを、教科書では一応整理した形で提示していく工夫がなされるわけなのですが、あまりにこの点にばかり拘泥しては、ことばの生きた動きを理解させるさまたげになります。常にことばの全容を感知させておくためにも、そのことばの機能や変化をかなり広範囲に区切って示し、それからその中の一つ一つを特に取りあげて習熟させていくほうが、一見無計画に見えながら、結果的にはことばの実体を習得させ得るものと考えます。教師の方々もこの点を了承されて、教室で、生徒の能力に応じ、紹介に留めておくべきことばや、形、理

解だけはさせるべきことばや形、実際に使用させるところまで訓練すべきことばや形——というような選定を各自でなさったうえで、読本を適切有効に利用していただきたいのです。

この読本におけるこのような融通性は、教材の種類や内容についても同様にそなわっております。御存知のようには、この日本語読本は、たんなる語学教科書ではありません。外国語としての日本語を、ハワイの児童に学ばせるという目的のほかには、多分に、ことばを通じて、日本自体を児童に理解させるという知識的開発の面、さらに進んでは、児童の情操を豊かにし、うるおわせるというような人間形成への一助という面をも受け持つものと、編者は自負しております。したがって、この読本は、まことに複雑な性格をおびていて、その取りあつかいは決して安易ではないでしょう。たとえば、「日本」を理解させるという一事について考えてみても、日本の風物、風俗生活などの紹介はもとより、日本語そのもの、すがたの紹介ということも、編者は意図しております。日本語の言語習性や発想などが児童の母国語のそれとは異っているという認識を、おぼろげながらも持たせたい——それがことばを習うことの本当の意味、ことばの本質を認識することの基礎的な心構えの養成になればということをも願って用意してあります。また教材の種類にも、語学教材としては高度になりすぎる表現で語ら

れる童話や読みものが、上級になるにしたがって多く取り入れられましようが、これは、児童に用語能力をつける目的とは別に、児童の理解力や思考能力、情操育成に重点をおいたものであるのです。これらの点も教師の方がじゅうぶん理解してくださり、各教材の目的を識別して適切な指導をなさるようお願いいたします。

次に直接法的教授法について、教師の方々の御了解を確認したいと思います。この読本が直接法的な教授方法をとることは、すでに一年上の教師用書巻頭に掲げられた、全巻にわたる編集方針に明らかにされており、教師の方々もこの方針によって教室作業を進められていることと思えます。したがって、この読本の語句や文型は、直接法で取り扱わなければ、指導が不可能、または困難になるような選定や提出順序によっていることも、よく理解していただいていると考えます。また、語学教育にあたって、ことに児童を対象とする場合、直接法が非常に有効であること、あるいは、この方法に拠る以外の方法のない場合も多いということもじゅうぶん認識されていることであろうと思えます。しかし、現場の具体的な教授にあたって「直接法」がどういう形で行われるべきかということの解釈や実態はさまざまであるようです。また個々の事情によって「直接法」への心構えや研究が不徹底になり、文法理論などの説明に基づいた教授方法や、翻訳に頼って理解させることにとどまる教授方法が

あるいは行われる場合もないではないようです。そもそも、この「直接法」といわれる教授法は、あえて言えば現段階では完成され確立されている方法とはいえないものです。現場の実績を積みあげ研究して解決していかなければならぬ問題が非常に多く、ことに児童を対象としているものは、教師各自の工夫をもつより他はない未分野の面が広いのです。

このような状態のなかで、教師の方々が、「直接法的指導法」の線を厳正につらぬき、児童や教材に適切な教室作業をさぐりあてていかれることは、容易なことではありません。この指導書の中で、「学習指導の展開」として述べられている部分には、教室作業の直接法的指導の具体的な参考にしたという配慮から、かなりくどいまでに、この提示の仕方と訓練の方法について解説してあります。しかし、ここに述べられている方法のみが唯一無二のものというわけではなく、直接法のあり方への勘やヒントを、ここから得てくださればと期待しているにすぎないものです。この指導書を通じて「直接法」というものが、あくまで、母国語に頼る説明や理解のさせかたを避けること。また理論的な知識としてことばを与えるのではなく、体験的な理解のさせ方を通して、ことばの用いられる場と意味を認識させること。ことばの学習がそのことばを用いる発表や表現の行為に連結しているものであることなどを目標としていることを理解して

いただきたいと思います。

たまたま、この読本の語句について、「文法的に程度が高くむずかしい形であるから」とか、「英語ではこのような論理的混用は許されぬから」とかいうような御意見が寄せられますが、ここですでに教師自身の了解のなかに、文法理論や母国語の発想や習慣に拘泥する態度から脱しきれず、直接法的な認識や取り扱いに徹底しきれぬ意識のなごりを発見するわけです。指摘されるこのような点も、これを直接法的な立場から再検討していけば、すなおに生徒に受け入れられる場合もあるのです。ことばというものは使われるべき場において適切に使われていけば、まず第一の目的は達せられるわけで、理論的な裏づけや理解はその目的の達成を助ける手段であって、理論それ自体を目的とする教育は、またべつの学問の分野に入れられるべきものだと思います。教師の方々は、できるかぎり児童の経験や現実生活を取り入れた場面設定を生かして、その場で必要とされることばや表現はこれであるというように、具体的にことばを与える方法に熟達していただきたいと思ひますし、日本語それ自体の発想や形を、母国語と異なるからという理由で敬遠することなく、むしろ、母国語とはべつにそのような表現のことばもあること、この約束を認識して、それにそった表現を身につけることが外国語学習の態度であることを見事に理解させていただきたいと思ひます。

この日本語読本の編集にあたって、編者と、現場の教師の方々との間に、緊密に緻密に打ち合わせられ了解されていなければならないことは、数限りなくあります。その細部の一つひとつについて、始終親しく会談し意見の交換を徹底的に行ない、双方の完全な納得のうえに仕事が進め得られるものならばということが、編者の憾みです。太平洋をはるか距てての仕事では、見解のゆがみ、事情のくいちがいを事にあたってじゅうぶんに検討することが許されない場合も多く、これは、教科書の作成というような性質の事業には、かなり重大な弱点です。このような不都合、不便をあえておかしてまで、ハワイ現地の方々は、日本本土にこの編集を委嘱された、この意義に、編者は深く思いをいたすわけです。これは、ひとえに、現在日本に住む日本人である 私たちは、日本語への正しく純粋な感覚と良識を信じられ、その上に立つ日本語読本に期待されるところが強いからに他ならないと思います。したがって、正しく純粋な日本語による教科書作成こそが、いかなる条件よりも優先するものと考え、これを目標として、これからも努力していくつもりです。現地の教師の方々も、編者の立場と覚悟を理解してください。日本語を学ぶ人たちにりっぱな日本語を、また、かたよりのない健康な日本語認識、日本認識を養成してください。御協力と御努力をお願いいたします。

二、指導の実際

単元1 みち

一、指導の時期

二月。約四週間を当てる。

二、指導の時間数

本文指導

三課を約十五時間

まとめ

三時間

練習問題

二時間

計 二十時間

三、この単元の趣旨

道はいつさいのものへ向って延び拡がりすべてを結びつけるものという概念でとらえられるべきものです。児童が個々の家庭生活からふみ出して、他の家庭や、建造物や、その集団である村や町、さらにそれらを統合する国というものへ、その想念を延ばし拡げていくものとしての道、児童が、自己中心の個人的関心から、次第に社会というものへ関心を誘導されていく道程としての道、

このような意味もふくめて道という単元を設定してみました。「ひろい みち せまい みち」は、形容詞の「ひろい」「せまい」を対照的に教えるためのものであると同時に、児童の家庭の周囲にめぐらされていて、近隣との交歓に用い、常に親しんでいる路と、市街を貫通している、交通や運搬の任を負う公共的な道路とを、——いわば、道にそなわる性質の二つの面を示めそうためのものでもあります。教師の方々も、このような点に留意されてこの教材を扱っていただき、さらには、遊び場としての道、友だちの家や、学校、公園、駅、マーケットなどへ通じていて日頃通いなれ、児童の日常生活に密接している道に児童の眼を向けさせ、その道の有様をとらえて言葉で表現できるように指導していただきたいのです。道の有様をとらえるということは、ある地点に立ち止まっていてする場合だけではなく、一つの道に沿って移動しながら行き過ぎ、迎え来る風物をとらえるという操作にも発展しています。その一例としてあげられるのが「はとの みち」です。これは、自動車の車窓から道の両側の風景をとらえ、さらにはその途中でおこった小さな事件に視点を向けています。このように、児童の眼を道に沿ってあゆませ移動させながら前方や両側に展開する風景を、次々に言葉につづるということも可能なわけで、読本におけるこの段階までの静止した局部的な外象のとらえ方から一步進んだ、連続的動的な表現の練習の段階

にもなっています。ともあれ、道という教材は、児童の関心や興味を外界へ導き広げさせていくことを第一の目的とするものです。身近かなものから始めて、できるだけ広く遠く、児童の眼を導き、これを既習の言葉を十二分に駆使して表現させる指導をお願いいたします。

四、学習指導の要点

○児童の身近かな道について話させる練習。

○形容詞、ひろい、せまいの練習。はじめ、巾にかかわる例でひろい川、せまい川、ひろいテープなどをじゅうぶん練習したうえで、ひろい部屋、せまい部屋などのように、空間的に大きい、小さい意味の場合にも使うことも教えてよい。

○「動詞＋ています」形の確認と練習。これはすでに上巻においてもかなり復習が積み重ねられているものであるが、もう一度、「動作の続行が状態の継続となる」形としての「います形」を、図示などの方法でよく認識させる。

○「動詞て形＋いきました」の練習。「て形＋きました」の形と対照させて、これが、その動詞のあらわす動作をしながら向うへ行ったり、こちらへ来たりする意味をあらわすものであることを理解させる。理解させるためには教師が実際に行動して見せたり、児童にさせてみたりすることで体験的に理解させるようにする。

○道について、両側、左側、右側、まんなかななどのことばに習熟させる。むこう側、こちら側なども同時に教えておくほうがよい。

五、学習指導の展開

ひろい みちです。
ひろい みち せまい みち
(本文)

(4ページ
5ページ)
(語句)

(・ひろい)

・ぼす
・ならんで います
・せまい

(文型・文法)

・ひろい みち
・せまい みち

こどもが、
あそんで います。
いぬも、いっしょに
あそんで います。
はなが、
さいて います。

単元1 みち

(ア) ひろい
せまい

みち

写真、図などを用意しておいて示す。

この みちは ひろいです。

” ” せまいです。

の形、また、

ひろくは ありません。

せまくは ありません。

の否定形も同時に提出し、問答練習の中にもじゅうぶ
ん採り入れる。

ひろい (せまい) ↓川、橋、トンネル

机、ドア、本

など、最初、中にかかわる形容詞として認識させ、次
に、「広さ」の表現にも用いられることを理解させる
ために(この意味は一応一年下韻文「うみ」で既出で
ある。)

ひろい (せまい) ↓へや、家、公園、島国、海、

なども提出する。

なお、

ながい みち みじかい みち

あたらしい みち ふるい みち

きれいな みち

などの観念も応用的にあたえてよい。

(イ) ばす。

図示。または写真で示す。理解させたうえで、

ばすは、じどうしゃより おおきいです。

ばすは、ひこうきより おそいです。

ばすは、ひろい みちを はしります。

ばすは、せまい みちを はしることが できませ
ん。

のような説明を聞かせ、さらにはこの形を問答に採り
入れて練習をする。

(ウ) ならんで います。

りんごが ならんで います。

せいとが ならんで います。

じどうしゃが ならんで います。

みせが ならんで います。

のように、りんご、せいと、じどうしゃ、みせなどが
並んでいる絵をあらかじめ用意しておいて種々示し、
どのような状態を言うことばであるかを理解させる。

このことばは、まず「ならんで+います」の形によ
ってあらわされる状態への理解と、その理解に基づく
練習と指導を第一段階とし、「ならぶ」という動詞そ
のもののあらわす行為を理解させることは第二段階と
してあつかう。従って、生徒の力が両方を同時に提出
して理解させるには十分ではない——混乱をまねくと
認められる時には、第一段階の練習だけに留めておい
てよい。

「ならば」の指導については、一年上巻既出の「ならばましよう」「ならばました」と対照させて理解させ練習させる。即ち、「ならばる」が他の物品をならばせることであり、「ならば」はそれ自体が並ぶ意であることを理解させるのであるが、両方とも実際の行為によって示して違いを分らせるのがよい。

最初、教師は様々のものをならばべて見せ、私は——をならばました。

と言って、「ならばる」の意を確認させ、これがじゅうぶん行われたうえで、「ならば」の指導に移り、——さん、××さん、○○さん、ここに ならばんでください。

——さんと ××さんと ○○さんは、ならばました。

(いま)、三人は、ならば います。

先生も、○○さんの うしろに ならばます。

(いま) なんん ならば いますか。

のようなやり方で理解させる。また、生徒をいろいろの場所に並ぶよう指導し、実際に並ばせることで理解させる。「ならばる」についても、生徒にいろいろのものを並べさせることで練習させるのもよい。

(エ)——て います の練習。

はしって います。

あそんで います。

さいて います。

など、状態の継続を表わす「——て います」形の復習を、もう一度ここで行う。これにはいろいろの絵を用意して、何をしているところか、生徒の知っている動詞で答えさせるのがよい。

(オ)みせ

一年上に既出。絵によって確認させ、くだものの みせ、はなの みせ、……など「××の」と上におくことで、いろいろの店の性質がもつとはつきりすることも理解させる。

学校、駐車場、動物園、水族館などの絵を示し、これも みせですか。

いいえ、そうでは ありません。

というように区別をはつきりさせておくことも必要である。

(カ)こども

いぬ

はな

既出であるから、じゅうぶん練習させる。この場合も絵本などを用意し、その絵に描かれている、こども、いぬ、はなの状態を、生徒に説明させていくような方法をとる。

(キ)いっしょに

一年下に既出。

「——は ××と いっしょに する。」
 の形を確認させて復習する。
 いぬは、ねこと いっしょに あそんで いますか。
 いぬは、だれと いっしょに あそんで いますか。
 いぬは、こどもと いっしょに たべて いますか。
 いぬは、こどもと いっしょに なにを して いますか。
 のような質問で、他の絵も使って問答する。

はとの みち (96 ページ)
 (本文)

おばあさんの うちへ
 いきました。
 おばあさんの ちは、
 やまの ほうに
 あります。
 おかあさんが、
 じどうしゃを
 うんてんして
 いきました。
 しずかな みちを
 とおりました。
 りょうがわに、
 おおきな きが、

(語句)

- ・うんてんし(て)
 - ・しずかな
 - ・とおり(ました)
 - ・りょうがわ
 - ・えだ
 - ・まんなか
 - ・なにか
 - ・けいてき
 - ・ならし(ました)
 - ・あぶない
- (文型・文法)
- ・うんてんして
 - ・いきました

ならんで いました。
 きの えだに、
 はとが たくさん
 いました。
 はとは、
 みちにも いました。
 みちの まんなかで
 なにか
 たべて いました。
 おかあさんは、
 じどうしゃを
 とめました。
 そして、
 けいてきを
 ならしました。
 おおきな こえで、
 「はとさん、
 あぶないですよ。」
 と いいました。

- ・しずかな みち
- ・りょうがわに
- ・ならんで いました
- ・まんなかで
- ・たべて いました
- ・じどうしゃを
- ・とめました
- ・けいてきを ならしました
- ・おおきな こえで
- ・いいました

(ア)おばあさんの ちは、やまの ほうに あります。
 ××の ちは —— に あります。
 の形を、問答によって練習させる。生徒それぞれの家、その友だちの家、その親類の家について、「山のほう」「海のほう」「まちのほう」「えきのほう」「こうえんのほう」などの言い方で説明させる練習をする。

(イ) (じどうしゃを) うんてんする

図示。動作でやってみせる。

汽車、電車、バスも同様運転するということも教える。

※飛行機、船、自転車は運転すると言わぬことに注意する。

あなたの うちに じどうしゃが ありますか。

おおきい (ちいさい、あたらしい、ふるいなど) じどうしゃですか。

だれが うんてんしますか。

おかあさんは、じどうしゃを うんてんする ことができますか。

あなたは、じどうしゃを うんてんすることが できますか。

などの質問を行って練習する。

(ウ) うんてんして いきました

きました

「して いきます」は二年上既出。

「して きます」は一年下既出。

その動作をしながらむこうへ行く場合が「して いきます」であり、その動作をしながらこちらへ近づくことが「して きます」であることを、動作で示しながら対照的に理解させる。

あるいて いきます。

きます。

はしって いきます。

きます。

とんで いきます。

きます。

およいで いきます。

きます。

のように動作と意味が明確に理解できる動詞についての形を、動作や、図で示しながら提示する。

※「作っていきます」「読んでいきます」などのようにその動作の進行をあらわす意味のもの、「呼んできます」「話してきます」のようにその動作をしてもどるという意味のもの、「勉強してきます」「たのんできます」のようにあらかじめ用意する意味のものなど「います」「きます」の意は多種多様であるから、教師は例示の場合の混乱をいましめて、実際に向うへ「行く」こちらへ「来る」場合に限った意味での例以外には口をすべらせないよう用意する。

※また「いってきます」「きます」が、話し手の位置を中心に行っていることも、例示と練習のうちに自然に理解させるようにする。

おとうさんは、会社(未出。英語でもよい)へ じどうしゃを うんてんして いきますか。おとうさんは、この がっこうへ じどうしゃを うんてんして きますか。

のような例を用いる。

(エ) しずかな

生徒がさわいでいるのをしずかになつたところ
で、またレコードなどでやかましい音楽を聞かせ、
それをとめたところで、

「しずかな へやです。」

「この へやは しずかです。」

のような提示。

子供が大勢遊んでいる公園や運動場の絵や写真を示し
て、

「しずかな

公園では ありません。
運動場では ありません。」

人気のなくなった夕方などの公園や運動場の絵や写真
で、

「しずかな

運動場
公園 ですよ。」

のような提示が適当であろう。

しずかな

へや がっこう みせ
みち まち うみ

など、様々のものを示す。

※「静か」はやかましくない意と、荒れていない意味
があるが、ここは前者にとどめる。

※生徒に余力があれば、「しずかにする」「しずかにし
なさい」などの言葉もあたえてよいが、これは教師の
選択にまかせる。

(オ)とおりに(ました)

教師が実際に、少し長い距離を歩いて見せて、

わたしは —— (オ) とおりました。

といって提示する。また、おもちゃの乗物などを走ら
せ、あるところを通過させたうえで、

じどうしゃは(でんしゃは)××さんの まえ(うし
ろ、右、左など) (オ) とおりました。

のような提示も出来る。ある地点からある地点までを
通過することであることを理解させると同時に、この
動詞は助詞として「を」をとることに注意させる。

練習は教師が動作してみせたり、生徒に動作させたり
して、だれが、どこをとったかを質問し答えさせる
方法とする。

あなたは、がっこうへ きます。
しずかな みちを とおりますか。

あなたは、みせへ いきます。
しずかな みちを とおりますか。

のような問答で練習させるのもよい。

(カ)りょうがわ

まんなか

まず、道の絵によって図示、それから、川、にわ、へや、
ぼす、つくえなどの両側、まん中についても提示する。

また、左側、右側なども同時に提示して、
わたしたちは、みちの まんなかを あるきますか。

じどうしゃは、みちの まんなかを はしりますか。

みせは、みちの まんなかに ありますか。
がっこうは、みちの ひだりがわに ありますか。
こうえんは、みちの みぎがわに ありますか。
みちの りょうがわに なにが ありますか。
じどうしゃを みちの まんなかに とめますか。
などの質問による練習をする。

なお、「しに あります」の形だけではなく、
りょうがわ（まんなか）は ××です。
りょうがわ（まんなか）を ××が とおって いま
す。

りょうがわ（まんなか）で たべて います。
の形もいれた問答をすることも必要である。

(キ)えだ

図示。「木のえだ」であって、花や草には「えだ」が
ないことに注意させる。

(ク)きの えだに はとが いました。

「しに あります」の形の復習。

絵本などによって、

××は どこに いますか。

の質問に答えさせて、じゅうぶん練習させる。

(ケ)はとは みちにも いました。

「しは しにも あります」の形の復習。やはり絵本を

使って、

「きのえだに はとが います。それから……？」

と、いうように誘導して、
「しにも あります」の形を生徒に言わせるようにする。

(コ)なにか

はとは、たべて いますか。
はい、たべて います。

なにを たべて いますか。

わかりません。なにか たべて います。

の順序で、教師が自問自答して提示する。

生徒に一応理解させたところで、

なにか もって います。

なにか かけて います。

なにか さがして います。

なにか ひろって います。

などのように、その物体があいまいな絵を用意して示

しながら、様々な例を提示する。

次に、

わたしは、なにか もって いますか。

わたしは、なにか たべて いますか。

わたしは、なにか みて いますか。

などの質問で、生徒に、

わたしは、なにか もって います。

わたしは、なにか たべて います。

わたしは、なにか みて います。

の答えを言わせて練習する。

(㉞) じどうしゃをとめました

「とめました」は一年下に既出。電車、バス、自転車なども「とめる」ことを理解させる。

(㉟) けいてき

図示。また音を聞かせる。

(㊱) ならしました

ベル、ブザー、その他いろいろのものをならしてみせて理解させる。

おかあさんは、なにを ならしましたか。

けいてきを ならしました。

せんせいは、なにを ならしましたか。

ベルを ならしました。

おかあさんは、なにを しましたか。

けいてきを ならしました。

せんせいは、なにを しましたか。

ベルを ならしました。

のような問答で練習する。

(㊲) おおきな こえで

二年上に既出。

おおきな こえで

はなします。	はなします。
いいいます。	いいいます。
よびます。	よびます。
へんじを します。	へんじを します。
うたいます。	うたいます。

などの形を問答にして練習させる。「ちいさな こえで」の形も一緒に練習させてよい。

(㊳) あぶない

あぶないものや状態の、絵や写真を見せて意味を理解させる。

こどもが、ひろい みちの まんなかを あるいて います。あぶないです。

たかい まどの うえで あそんで います。あぶないです。

たかい きに のぼって います。あぶないです。

などの例を話して理解させてもよい。

また、

あぶない川だ、いわ、うみ、かわ、ふね

などの形容詞の形も提示する。生徒が理解したら、

なにが あぶないですか。

どこが あぶないですか。

の質問に答えさせて練習する。

(㊴) この課の全文について理解と練習が済んだら、この内容について生徒に質問をする。

どこへ いきましたか。

おばあさんの ちは、どこに ありますか。

ばす (きしゃ、ふね、ひこうき、じてんしゃなど) で

いきましたか、じどうしゃで いきましたか。

おかあさんが、うんでん しましたか。おとうさん

(おじいさん、おかあさん、にいさん、ともだちなどが、うんてん しましたか。

だれが、うんてんして いましたか。

ひろい (せまい) みちを とおりましたか、しずかな

みちを とおりましたか。

りょうがわに みせ (じどうしゃ、どうぶつ、はなな

ど) が、ならんで いましたか。

なにが、ならんで いましたか。

きの えだに きじ (さる、はちなど) が、いました

か、はとが いましたか。

はとは、どこに いましたか。

はとは、みちにも いましたか。

はとは、じどうしゃの うえにも いましたか。

はとは、なにを して いましたか。

どこで たべて いましたか。

おかあさんは、じどうしゃを とめましたか。

おかあさんは、らじおを とめましたか。

おかあさんは、けいてきを ならしましたか。

おかあさんは、れこうどを ならしましたか。

おかあさんは、「はとさん、こんにちは」といいまし

たか。

(おかあさんは、なんと いいましたか。)(この形は未

出) などの順序で問答をする。

(イ) 時間や生徒の力に余裕があれば、生徒のドライヴの経

験を話させる。一人がいちどにまとめて話せなければ、はじめから少しずつ誘導して話させ、あとでまとめさせるようにする。

あかい とり ことり (1110 ページ)

(本文)

あかい とり、ことり。
なぜ、なぜ、あかい。
あかい みを たべた。
しろい とり、ことり。
なぜ、なぜ、しろい。
しろい みを たべた。

語句、文型、文法ともに指導の対象とはしない。生徒に暗誦させ、またでければ歌えるように指導する。生徒に力があれば、「なぜ」の語の意味を理解さ

せ、「なぜですか」という質問の形をあたえてもよい。そしてその答の形として「そうですから」「しますから」があることも一緒に理解させ、問答による練習をすることも可能であろう。

まとめ

(一) 形容詞。ひろい、せまいの意味の確認と練習。絵や物品によって、すばやく示して、反射的に、ひろい、せまいが口に出るように練習させる。

(二) りょうがわ、まんなか、の理解の確認。左側、右側、

(余力があれば)むこう側、こちら側などもませ、絵を見せながら「しは どこに いますか。」の質問による練習をする。

(三)状態の継続を表わす「して います」形の復習、これも絵を使って、生徒の既習の動詞で状態の説明をさせる練習をする。

(四)「して いきます」「して きます」の練習。

生徒にあちらへ、こちらへ移動させながら動作をさせ、適確にこの形で、動作の説明ができるところまで練習させる。

練習問題

(一)動詞をいれなさい。

じどうしゃを

けいてきを

しずかな みちを

きの えだに はとが

みちの まんなかで

りょうがわに みせが

まんなかを ばすが

(二)ことばを えらびなさい。

おばあさんの

うちは

やまの うえに
うみの ほうに
やまの ほうに
のはらの ほうに

あります。

おかあさんは

ばすを
じどうしゃを
きしやを
ふねを

とめました。

きの えだに

さるが
はちが
こどもが
はとが

たくさん いました。

はとは

ばんを
たまごを
なにか
はなを

たべて いました。

おかあさんは、

さようなら
あぶないですよ
きれいですね
ごちそうさま

と いました。

「はとさん、

(三)適当な形容詞と結びつけなさい。

まるい

ごちそう

すずしい

じどうしゃ

はやい

つき

あたらしい

どうぶつ

たかい

ほん

ひろい

かぜ

おいしい

やま

おとなしい

うみ

(四) 質問に答えなさい。

○あなたは、おばあさん（おじいさん、おじさん、おばさんなど）の 家へ 行きましたか。

○なんで（じどうしゃで、ふねで など）行きましたか。

○だれと いっしょに 行きましたか。

○しずかな（きれいな、ひろいなど）道を 通りましたか。

○りょうがわに おおきな 木が（店が、やしの木が、きれいな花がなど）並んで いましたか。

○とり（どうぶつ、人など）が いましたか。

○こどもが（いぬが、ねこが、はとがなど）あそんでいましたか。

○おばあさんの（おじいさんの、おじさんのなど）家はひろいですか。

○どうぶつや とりが いますか。

○おばあさんの（おじいさんの、おじいさんのなど）うちで なにを しましたか。

(五) 前の質問を全部まとめて作文を書きなさい。

単元2 よみます

一、指導の時期

三月。約三週間を当てる。

二、指導の時間数

本文指導 二課を約十時間

まとめ 約三時間

練習問題 約二時間

計十五時間

三、この単元の趣旨

言語活動の領域は、聞く、話す、読む、書くの四つの能力に分けられます。したがって言語指導においては、この四つの能力を、かたよりなく伸長させていくことが目標になるわけですが、まだ、文字を識別したり、書記したりする力が身につかない初歩の段階では、聞くこと、話すことが指導の中心になることは止むを得ぬことです。また、日常的な言語能力というものを目標にした

場合には、何はともあれ対手のことばを聞いて理解し、こちらにも口に出して意志を伝える直接的な方法が重要視され、優先することも当然です。この二つの理由で、何よりも聞き分けさせること、それに端的に応答させること、発表させることが、この教科書においても一年、二年上巻の大部分の教室作業のあり方でした。しかし一方、一年においては、ひらがな全部の提出が終り、生徒も一応はこれを読みわけ、音読すること、また書き分け書記することが可能などころまで指導されているはずで、そこで、この方面の能力、書く能力までは、一がいに強いられてなくても、読む方は、このあたりで一度整理し、確認するほうが、将来への布石として適当なのではないかということ、この単元では、教師のかたがたに、「読む」ということをとくに指導の計画の中に組み入れた工夫をしていただきたいと思うのです。一年からこれまでに習った各課を、正しい発音で句切れも正しく音読できるかどうか、もう一度、読み方の復習をしていただくのも結構ですし、ひらがな書きで、また、生徒の既習語でこなせる程度の読み物を選ぶか、作成なさるかして副教材的に与えて、そういうものに興味を持たせ、自発的に読む力をつけさせるよう誘導してくださることも望ましいところです。「らくだの みみ」は、このような読みものの一例として提出された教材です。内容を理解させ、ことばの使い方の練習をさせることは従来どおり

ですが、とくに、この課では音読を繰り返しさせて、読む練習を多くしていただきたいのです。ただ正しく発音しているかどうかというような段階にとどまらず、内容を理解したうえで、読みこなせているかどうかというところまでを確認していただければよいと思います。地の文章、らくだのことば、人間のことばを、読み手をかえて、読み分けさせるなども内容を考え、理解しながら読む態度を養うのに効果があります。『なきごえ あそび』は、音のとらえ方が、国語によってずいぶん違うことを認識させ、その実際の音を表記する場合、表記されたものを読む場合の、例とやり方を一とおり示すためのもので、それを、分かりやすく、楽しく理解させるために、あそびの形式にして提出してあります。それぞれの動物の、英語での鳴き方と比較させたり、またそれを、ひらがなで書きあらわすとどうなるかなどを実際書かせてみたりします。音を、字にうつすことのむずかしさを経験することで音や、文字の重要さや機能をおぼろげに悟らせることにもなります。

なお、読み教材は、話し教材より、文構成がどうしても複雑になったり、情趣をある程度取り入れるために高度になったりしますが、これは、いきなり生徒自身が話せるところまで指導するのではなく、文脈や前後の関係や照応をたどって、理解する方法へ誘導し、この態度を訓練するためのものですから、理解させるべきことは

や文と、使い馴らさせるべきことばや文とを教師のかたがたが、それぞれの状況下で選んで指導してください。それで結構なのです。

四、学習指導の要点

1 「らくだの みみ」について

○文章を一連ずつ区切って意味を考えさせながら読む練習をさせる。

○全文を何章節かに区切って話の展開の順序をはっきりつかませる。

○動物の耳、角、牙について、実物や絵、写真などによって観察させ、どんな状態かを説明させる。

○「らくだは かんがえました」、「らくだは たのみました」、「にんげんは いいました」という説明のあとに、かんがえたこと、たのんだこと、いったことの内容が提出される文の形に馴れさせること。同時に「らくだは こと かんがえました」の形に直させる練習もして、地の文章と話の部分の関係や展開の形をだんだん理解するよう注意を向けさせる。

○「なにも ありません」の形による全面否定の文型の練習。

○「ちいさく なりました」「形容詞+なります」の形は、ここであまり詳細に説明や練習をしないでおく。前に「ちいさく」なかったものが、現在ちいさい状態

である意味であることがおぼろげに理解できる程度でよい。

2 「なきごえ あそび」について

○動物の鳴き声を文字にかいて読む練習をする。

○英語の場合の鳴き声と比較させる。

○動物、またはその他にも音を出すものをあげて、その音を発音させ、ひらがなで書かせてみる。

○「しりません」「しって います」「しって いますか」の練習をじゅうぶんにさせる。

五、学習指導の展開

らくだの みみ (1714 ページ)
(本文)

むかし むかし、
らくだには、おおきい
みみが ありました。
あるとき、らくだは
かんがえました。
「うしには、おおきい
つのが あります。
ぞうには、おおきい
きばが あります。
わたしには、
なにも ありません。」

(語句)

- ・ らくだ
- ・ あるとき
- ・ うし
- ・ つの
- ・ きば
- ・ なにも (ありません)
- ・ かみさま
- ・ つけて (ください)
- ・ よろこび (ました)
- ・ みせ (ました)
- ・ へんな
- ・ そのとき

らくだは、かみさまに
たのみました。

「どうぞ、わたしにも、
つのを つけて
ください。」

かみさまは、らくだに
おおきい つのを
つけました。

らくだは、たいへん
よろこびました。

みんなに つのを
みせました。

らくだは、にんげんにも
その つのを
みせました。

にんげんは
いいました。

「おや、おや、らくだに
つのが あります。
へんな らくだですね。」

にんげんは、
らくだの つのを
きりました。

そのとき、

そのとき、

(文型・文法)

- ・ (うし)には (つの)
が あります
- ・ なにも ありません
- ・ ちいさく なりました

らくだの みみも、
いっしょに
きりました。
それから、
らくだの みみは、
ちいさく なりました。

(ア)むかし むかし、らくだには おおきい みみが あり
ました。

ここまですを なんんかの生徒に読ませる。次に、らく
だの絵を見せ、

「らくだには、め（みみ、はな、くち、あしなど）が
ありますか。」

「おおきい め（みみ、はな、くち、あしなど）が
ありますか。」

の質問により、現実のらくだの生態をよく観察させ
る。

次に、

「むかし むかし、らくだには、おおきい め（みみ、
はな、くち、あしなど）が ありましたか。」

と質問して、むかしのらくだの姿を想像させる。

(イ)あるとき、らくだは かんがえました
ここまです、またなんんかに読ませる。

「らくだは、なにを しましたか。」

「らくだは かんがえました。」

「いつ、かんがえましたか。」

「あき、かんがえましたか、よる かんがえました
か。」

「きのう、かんがえましたか、ずっと、むかし かん
がえましたか。」

「わかりません。あるとき、かんがえました。」

のような教師の自問自答で、「あるとき」を理解させ
る。また、「あるとき」が過去における不確かな時間
を指すことばであることを理解させ、常に「あるとき
……た」の形であることを、例文でたくさん示す。

「あるとき、ありが、かわに おちました。」

「あるとき、おばあさんは、ももを ひろいました。」

「あるとき、さるは、かきの たねを ひろいまし
た。」

など。

※「ある」は「あるひと」「あるところ」などいろい
ろにつくが、ここでは「あるとき」の形でだけ提示し
ておく。

(ウ)うしには、おおきい つのが あります。

ぞうには、おおきい きばが あります。

わたしには、なにも ありません。

ここまですを一章節として区切って、何んかに上手に読
めるまで繰り返し読ませる。

「うしには、なにが ありますか。」

「ぞうには、なにが ありますか。」

「らくだには、つのが ありますか。」

「らくだには、きばが ありますか。」

と質問してきて、

「らくだには、つのが ありません。きばが ありません。つのも きばも ありません。なにも ありません。」

と言って、何も無い意味を理解させる。さらに理解を確かにするために、

「つくえの うえに なにが ありますか。」

「なにも ありません。」

「はこの なかに なにが ありますか。」

「なにも ありません。」

と、何も無い状態を作っておいて、自問自答の形で、

「なにも ありません。」を提示する。

次に生徒に、

「あなたには、つのが きばが ありますか。」

「あなたには、ながい はなや ながい みみが ありますか。」

「あなたには、じどうしゃや ふねが ありますか。」

などの質問で、「なにも ありません」の形を練習させる。

※生徒に余力があれば「なにも いません」「なにも

たべません」など、他の動詞と一緒にの形を教えるも

よいが、一応「なにも ありません」の意味と形をしっかりと覚えさせることに重点をおく。

(エ)らくだは かみさまに たのみました。

何人かに音読させたのち、

「らくだは、さるに たのみましたか。」

「らくだは、おとうさんに たのみましたか。」

「らくだは、かみさまに たのみましたか。」

のように説明しながら、「かみさま」の絵などを見せる。

「あなたは、かみさまに たのみますか。」

「かみさまは、どこに いますか。」

「かみさまは、ふとって いますか、やせていますか。」

などの問答で生徒のイメージを確かめる。

(オ)どうぞ わたしにも つのを つけてください。

これを一章節として何人かに音読させる。

○次に「つける」という語を理解させるために、

「(ようふく)に はなを つけます。」

「ぼうしに (リボン)を つけます。」

「じてんしゃに かぎぐるまを つけます。」

などを動作、または図によって示しながら説明する。次に「つけて ください」を理解させるために、

「——さん、——に ——を つけてください。」

と命令して動作をさせ、

「あなたは、なにを、しましたか。」

と質問して、生徒に、

「わたしは、——に——を、つけました。」

と答えさせて練習する。

○「つけて、ください」を生徒がじゅうぶん理解したと

ところで、読本にもどり、

「らくだは、つのを、つけて、くださいとたのみま
した。」

と説明する。問答は、

「らくだは、きばを、つけて、くださいとたのみま
したか。」

「らくだは、リボンを、つけて、くださいとたのみ
ましたか。」

「らくだは、なにを、つけて、くださいとたのみま
したか。」

の順序で進行させる。

応用としては、教師は、生徒に様々の場所に色々のも
のをつけてくれるように頼み、

「わたしは、なにを（または——をどこに）つけて
くださいとたのみましたか。」

と質問して、生徒に答えさせる。また、「つける」と
いう動詞だけでなく、既習の動詞の「してください」

形で命令して、生徒に、

「わたしは、なにを、してくださいとたのみました
か。」

という質問に答えさせる方法もある。また、

「わたしは、かみさまです。あなたは、わたしにた
のんでください。」

というように誘導して、「どうぞ、わたしに——てく
ださい」の形を生徒に使わせるように練習もする。

(カ)かみさまは、らくだに、おおきい、つのを、つけま
した。

これだけ区切って何人かに音読させる。

「かみさまは、らくだに、ちいさい、つのを、つけま
したか。」

「かみさまは、らくだに、おおきい、きばを、つけま
したか。」

「かみさまは、らくだに、なにを、つけましたか。」
などの質問で理解を確かめる。

(キ)らくだは、たいへん、よろこびました。

みんなに、つのを、みせました。
にんげんにも、その、つのを、みせました。

これを一章節としてなん人かに音読させる。
○「よろこびます」「よろこびました」を理解させるた
め、絵や、写真を助けにして、

「おくりものを、もらいました。」

「よろこびました。」

「きょうそうして かちました。」

「よろこびました。」

「いいすたあの たまごを みつけました。」

「よろこびました。」

「かきの みが なりました。」

「かには よろこびました。」

などのように説明する。生徒に「よろこぶ」の意が理解できたら読本にもどり、

「らくだは、つのを もらいました。」

「らくだは よろこびましたか、おこりましたか。」

「らくだは すこし よろこびましたか、たいへん

よろこびましたか。」

のような質問によって、内容の理解を確かめる。

○「みせました」

この語は新出であるから、既出の「みました」「みえました」と対照させながら、提示する。

「——さん、わたしを みて ください。」

「あなたは、わたしを みて います。」

「なにが みえますか、はなして ください。」

「わたしは、あなたに えを みせます。」(動作)

「——さん、えが みえますか。」

「わたしは、えを みせましたか、ほんを みせましたか。」

のような方法が一例である。また、様々のものを生徒

に示し、

「わたしは、なにを みせましたか。」

と質問して生徒に答えさせることで「みせます」の練習をする。

「みせます」を理解させたうえで、読本にもどし、

「らくだは、みみ(め、きば、など)を みせましたか。」

か。」

「らくだは、なにを みせましたか。」

「らくだは、かみさま(おとうさん、おかあさん、など)に つのを みせましたか。」

「らくだは、だれに つのを みせましたか。」

などの質問で内容の理解をたしかめる。

○「にんげん」の提示。

「らくだは、にんげんにも つのを みせました。」

と、いいながら、おとな、こども、男、女などの絵を示し、

「この ひとたちは、みんな にんげんです。」

と提示する。なお、動物、とりの絵を示し、

「これは どうぶつ(とり)です。にんげんでは ありません。」

と説明する。

(ゆ)にんげんは いいました。

「おや、おや、らくだに つのが あります。へんな らくだですね。」

これをまとめて音読させる。

○おや、おや

どんな場合に、このことばを発するかを、場面を設定して使ってみせることで理解させる。生徒が自然に使うようになるのはかまわないが、とくに練習させる必要はない。

「おや、おや、いぬが、きょうしつに います。」

「おや、おや、いさむさんは、あかい(りぼん)をつけて います。」

「おや、おや、きょうしつで りんごを たべています。」

などの例で示す。

○へんな

へんな とり、へんな さかな、へんな じ、へんな かおなど数多く提出して理解させる。

はなのみじかいぞう、くびのみじかいきりん、みみのまるいうさぎなどを描いて、へんなぞう、へんなきりん、へんなうさぎなどのように提出してもよい。

※「このらくだは、へんです」の形も生徒に余裕があれば教えてよい。

「へんな らくだ(ぞう、きりん、うさぎ、など)です。なぜですか。」

の質問で、へんな理由をいわせる練習をさせる。「なぜ」を前の単元で練習していない場合には、「へんな

らくだです」「つのが あります」と、教師が例をいくつか示し、次に教師は「へんな——です」のほうだけ言って、生徒に理由をつけさせるよううながし誘導する方法をとる)。

最後に、

「にんげんは、なんと いいましたか。」

と質問して、人間のことばをらくに言えるよう練習させる。

(め)にんげんは、らくだの つのを きりました。

そのとき、

らくだの みみも いっしょに きりました。

○きりました

「きる」は一年下単元8 「わらいばなし」に既出。

色々のものを切るまねをして、

「なにを きりましたか。」

の質問で復習。

○そのとき

話題になっている時と同じ時の意であることを例文で示す。

「おばあさんの うちへ いきました。」

そのとき、おかあさんも いきました。」

「あした、どうぶつえんに いきます。」

そのとき、おとうとも いきます。」

「おかあさんが、ちゃんを あらっていました。そ

のとき、あかちゃんが なきました。」

「おきやくさまが きます。そのとき、ごちそうを
だします。」

など、過去、現在、未来にかかわりなく使えることも
理解させる。

○いっしょに

他の人間とともに行動する意の「いっしょ」にはたび
たび既出であるが、これは「つのと」ともにの意味で
あるから、べつに理解に抵抗はないと思うが、この種
の例を示めす。

ほんと いっしょに えんぴつも もっています。

たまごと いっしょに さらだも たべました。

ちやわんと いっしょに さらも あらいました。

それから教師は二ついっしょにして色々の動作をやっ
てみせ、

「わたしは、なにを しました(して います)か。」

の質問で生徒に答えさせて練習をする。ことに「しと
いっしょに しも」の形を正確に記憶させ訓練する。

次に読本にもどって、

「にんげんは、らくだの みみ(あし、てなど)もつ

のと いっしょに きりましたか。」

「にんげんは、つのと いっしょに なにを きりま

したか。」

の質問で、内容の理解を確かめる。

(2)それから

らくだの みみは、ちいさく なりました。
ここを、またなんんか音読させる。

○それから

一年上単元4「あき」に既出。ただし、一年の場合の
意味は「そのつぎに」の意であるのに対して、ここ
の意は「この時にはじまって」の意味である。とくにこ
の区別をはっきり生徒に説明し使い分けをさせる必要
はないが、教師側は例文を提示する時に、後者の意味
のものが示されるよう用意する。ただし、この意味の
「それから」は「しりました」の形をとともなう場合
が多いので、生徒に紹介して聞かせる程度でとどめ
る。練習させ教えこむところまではこの段階では無理
であろう。

「みちの りょうがわに、みせを つくりました。そ

れから、みちは せまく なりました。」

「つきが できました。それから、あかるく なりまし

た。」

○ちいさく なりました。

これも紹介の程度にとどめておく。教師が風船に息を
入れたりすぼめたりして、「大きくなりました」「小さ
くなりました」と言いながら示せば生徒も容易に意味
がつかめよう。テープレコーダーのようなものをまわ
して「はやく なります」「おそく なります」、扇風

機などを使って「すずしく なります」なども理解させやすい。教師が各自工夫して「しなります」の意味を大体でも生徒に会得させられればよい。

「むかし、らくだには おおきい みみが ありましたか、ちいさい みみが ありましたか。」

「らくだの みみは、ちいさく なりましたか、おおきく なりましたか。」

などの質問で内容の理解を確かめる。

(㉞)全文を繰り返し音読させて、読み方の指導をする。

(㉟)内容を順次話させる。何人かにわけて話させたら、一人にまとめて話させるようにする。

なきごえ あそび

(2118 ページ)

(本文)

なつお 「なきごえ あそびを しましょう。」

みのる 「どう するのですか。」

なつお 「わたしが、どうぶつの なまえを います。」

あなは、 その どうぶつの なきごえを

(語句)

- ・ なきごえ あそび
- ・ どう (するのですか)
- ・ なきごえ
- ・ わかり (ました)
- ・ はじめ
- ・ わん わん
- ・ うし
- ・ もう もう
- ・ つぎ
- ・ うま

みのる 「はい。わかりました。」

なつお 「さあ、はじめましょう。はじめはいぬ。」

みのる 「わん、わん。」

なつお 「うし。」

みのる 「うしは、もう、もう。」

なつお 「つぎは うま。」

みのる 「ひひん、ひひん。」

みのる 「こんどは、わたしが、どうぶつのが、どうぶつのが、なまえを いますよ。」

なつお 「にゃお、にゃお。」

みのる 「かわいい ねこです。ねこ。」

なつお 「きやっ、きやっ、きやっ。」

みのる 「こんどは きり

- ・ ひひん ひひん
- ・ にゃお にゃお
- ・ きやっ きやっ き
- ・ やきやっ
- ・ しり (ません)
- (文型・文法)
- ・ どう するのですか
- ・ しりません
- ・ しって いますか

ん。」
 なつお 「さあ、しりません。
 あなたは、きりん
 の なきごえをし
 っ て いますか。」
 みのる 「わたしも しりま
 せん。」

(ア) なきごえ

なきごえ あそび

教師が、動物や鳥、虫の鳴き声をないてみせて、「なきごえ」の意味を生徒に理解させる。

「――の なきごえを いって ください。」

と生徒に言わせて理解の確認をする。

○ なきごえ あそび

つみきあそび にんぎょうあそびなどの絵によって理解させる。

(イ) なきごえ あそびを しましう。

すすめうながす意の「しましう」は一年上単元8「きらと ちゃわん」に既出。復習をする。

(ウ) どう するのですか。

やり方の説明をもとめる時の質問のことばとして、文法的な分解や説明をせずこのまま教える。

※従って「どう書く」「どう読む」などの形までひろ

げる必要はこの段階ではない。

ゲームや折り紙などを持ち出して、教師は知らない様子を示し、生徒に、

「これは どうするのですか。」

と質問して方法を説明させることを繰り返して理解させる。

(エ) なきごえ あそびは、どう するのですか。」

と教師は生徒に質問して、なつおがした説明をなんんかに言わせてみる。

(オ) わかりましたか。

「五月五日は なんの日ですか。」

「わかりません。」

「五月五日は こどものひです。わかりましたか。」

「はい、わかりました。」

「はいびすかすは、はわいしゅうのはなです。にはんの はなは、なんですか。」

「わかりません。」

「にほんの はなは、さくらです。わかりましたか。」

「はい、わかりました。」

「きょうは なに(ん) ようびですか。」

「わかりません。」

「きょうは げつようびです。わかりましたか。」

「はい、わかりました。」

などのように教師が自問自答で例を示し、説明された

ことに対して了解した時に使うことばであることを理解させると同時に否定形「わかりません」も提示しておく。次に前例の質問を教師がして生徒に答えさせて練習する。

(カ) さあ、はじめましょう。

「さあ」は一年下単元3 「うさぎと かめ」既出。

「はじめる」は一年下単元8 「はなしかたの かい」既出。物事をはじめることをすすめるうながす意味であることを、

「これから ××を はじめます。さあ、はじめましょう。」

とって始めさせることで理解させる。

(キ) はじめ

いろいろのものを並べて、

「はじめは ××です。」

ということで例示する。

はじめの 人、はじめの 木、などの形、

はじめに ——— が きました。 の形

も一緒に教える。

(ク) わん、わん

いぬのなき声であることを理解させればよい。

(ケ) うし

図示。うしについていろいろな質問をする。

「うしの くび(はな)は ながい ですか。」

「おおきい つの(きば)が ありますか。」

「うしは おとなしいですか。」

「うしは はやいですか。」

など。

(コ) もう、もう

うしのなき声であることを理解させればよい。

(サ) つぎは

一年上単元7 「いっぴき たりません」に「つぎつぎ」の語がある。あるものにつづく順序であることを理解させるために、

「××さんの つぎは ○○さん、○○さんの つぎは △△さんです。」

また、

「きょうの つぎは あしたです。」

「どようびの つぎは にちようびです。」

などでも提示できよう。

つぎの 人、つぎの にちよう などの形、

「××さんの つぎに △△さんが います」の形も一緒に提示する。

(シ) うま

図示。うまについていろいろな質問をする。

(ズ) 「ひひん、ひひん。」

うまのなき声であることを理解させればよい。

(セ) じゃお、じゃお

ねこのなき声であることを理解させればよい。

と質問して、

ねこのなき声であることを理解させればよい。
(ウ) ですね。

話しかけの調子をあらわす意味の「ね」生徒にとくに
言わせるところまで練習しなくてもよいが、自然に出
る場合はかまわない。

教師は一応、

「はい、じどうしゃですね。」

「かわいい、にんぎょうですね。」

「おとなしい、いぬですね。」

「あの、ひこうきは、はいですね。」

「この、じてんしゃは、あたらしいですね。」

「この、みちは、しずかですね。」

「なつおさんは、やせて、いますね。」

「あかちゃん、みるくを、のんで、いますね。」

などの形を提示しておく。

(ウ) かわいい

二年下单元2 「おひなさま」 既出。復習をする。

(チ) きゃっ、きゃっ、きゃきゃっ

さるのなき声であることを理解させればよい。

(ツ) しりません

しっています

生徒の知っているもの知らないものの絵をとりまぜて
示し、

「これは、なんですか、しっていますか。」

と質問して、

「はい、しっています。それは、——です。」

「いいえ、しりません。」

の形で答えさせ練習をする。肯定の時に「しっています。
す」になり、否定の時は「しりません」でよいことを
厳重に教えこんで練習させる。

※「分かる」と「知る」は「理解できている」という
意味で同意になることがある。しかし、この課では
「分かる」のほうは「わかりました」の形でのみあた
え、説明に対して了解がついたことを表わす場合だけ
に使うことばとして教え、「知る」はその認知が既に
あるという意味でのみ使わせるよう、例文や質問の提
出に注意して、この二つを強いて関係づけて生徒に混
乱を起させないようにする。

「あなたは、××さんの、おかあさんを、しってい
ますか」

「あなたは、とうきょうを、しっていますか。」

などの質問にも答えさせて練習する。

(ケ) 読本以外のいろいろの動物をあげて、

「××の、なきごえを、しっていますか。」

と質問して、知っていれば、なかせてみたり、黒板に
書かせたりし、知らなければ「いいえ、しりません」
の形をいわせる。

(ト) クラスを二つに分けて、動物、とり、乗物などの音を

いわせるあそびをさせ、その音をノートにそれぞれ書かせてみる。

まとめ

(一)「どう するのですか」の質問に馴れさせ、この問いにすぐ反応する練習をする。スポーツ、ゲーム、つみ木、おり紙などの遊びをあげて教師がこの質問を出して、生徒に答えさせる。また生徒同志にやらせてもよい。

(二)「なに」の下につく助詞によって、その意味が異なり、したがって、下につく動詞もそれによって選ばれることを理解させる。

「なにが」「なにを」「なにか」「なにも」の形をつかって質問したり、答えさせたりして練習をする。ことに「なにを たべますか」「なにか たべますか」の違いはよく練習させる必要がある。即ち、「なにを たべますか」の質問には「××を たべます」と目的物を明確にあげさせ、「なにか たべますか」の質問には「はい、たべます」「いいえ、たべません」のように、たべるか、たべないかが問題になるのだということ、を繰り返して問答することで会得させる。「なにも ありません」は、「なにが ありますか」の質問の中に、なんにもないものをたびたび指して質問することで練習する。

(三)なき声を記憶させることは重要なことではなく、その

音を文字にあらわして書いたり書かれた文字を読んで判断することが必要なのであるから、この他のいろいろの音を書いて、ひらがなの一音一音をたどって正確に読む練習、音を聞いてひらがなで書く練習をじゅうぶんさせる。

(四)「——には ——が あります。」

の形の確認と練習。教師が、

「××には ——。」

と言いきまして、生徒にいろいろのものをあげて、

「——が あります」

とつけさせるような形で練習をする。

練習問題

(一)なにがありますか。

ぞうには、おおい が あります。

きりんには、ながい が あります。

うさぎには、あかい が あります。

うしには、おおい が あります。

らくだには、ちいさい が あります。

はるこさんには、かわいい が あります。

す。

いさむさんには、あたらしい が あります。

ます。

(三) なき声を記憶させることは重要なことではなく、その

ます。

(二) ーに ことば (助詞) をいれなさい。

れいを つくります。

かみさまは、らくだ ー おおきい つの ー つけまし
た。

らくだは、にんげん ー つの ー みせました。

ぞう ー おおきい きば ー あります。

わたし ー なに ー ありません。

あなたは、きりん ー なきごえ ー してありますか。

なつおさんは「いぬの なきごえ ー 言って くださ

い。」 ー みるさん ー たのみました。

(三) の動物がなきますか、なきごえを書きなさい。

かんがるう

ぞう

ねこ

うさぎ

らいおん

きりん

さる

いぬ

きじ

ふた

はと

かめ

たぬき

くじら

かに

はち

(四) どうするのですか。

かぶとを おります。

じてんしゃの きょうそうを します。

つなひきを します。

たんじょうびの てがみを かきます。

かくれんぼを します。

単元3 はるが きた

一、指導の時期

三月。約一週間

四月。前半約二週間

の三週間で当てる。

二、指導の時間数

本文指導

二課を約十時間

まとめ

三時間

練習問題

二時間

計十五時間

三、この単元の趣旨

この単元は季節として、三、四月、ちょうど春の頃にあたります。日本のように四季の移り変わりがはっきりしている風土では、季節が生活や行事に反映し、気分までがその影響を受けるのは当然ですが、ことに春は、寒い、暗い忍耐の時から解放される時、花のなかつた風景が花におおわれ、心もからだも希望に満ちる実感を強く味わ

う季節です。そのような春の到来への喜びやはれやかな気分をこの単元には盛ろうとしました。韻文「はるがきた」は小学校唱歌として祖父母、父母と愛誦されてきたもので、春の気配を感じ取れば、日本人のだれもおおのずから口ずさむなつかしい歌です。ハワイの児童ともども春への謳歌として歌いあう楽しさを願って採りました。えはがきは、日本の春の消息を生徒に伝えるという目的の他にすでにひらがなも書けるようになった生徒の応用として、簡単な、はがき文に馴れさせ興味をそそりたいとの意図のものです。読本のものを見本として、日本文のはがきの簡単な書き方の指導をし、大いにはがきの交換をすすめてくだされば実用にもなり、よい練習だと思えます。

四、学習指導の要点

○「おげんきですか」「ではお元気で」「くによろしく」

「くありがとうございました」などの簡単な手紙用語の指導。

○簡単なはがきの書式の指導。即ち、はじめあて名の人への呼びかけ、つぎに健康をたずねること、用件にはいり、別れのあいさつをするという四段階をふむこと。返事は受け取ったお礼からはいることなどを会得させる。

○えはがき、こづつみ おくりものなどをもらった経験

におおわれ、心もからだも希望に満ちる実感を強く味わ

○えはがき、こづつみ おくりものなどをもらった経験

を思い出させ、その形態について説明させる練習。

○ハワイの春について、他の季節とどんな風にちがうかを考えさせ話させる。

○えはがきを書かせる。教師が生徒にえはがきを出して返事を書かせたり、生徒同志で交換させたりする。

なお病気の友人や転校した友人などがあれば、実際にその人宛のものを書かせれば、生徒の意欲を刺激することになろう。

○希望をあらわす助動詞「したい」の指導と練習。

五、学習指導の展開

はるが きた (文部省唱歌)

(2524 ページ)

はるが	きた。
はるが	きた。
どこに	きた。
やまに	きた。
さとに	きた。
のにも	きた。
はなが	さく。
はなが	さく。
どこに	さく。
やまに	さく。

語句、文法、文型とも指導の対象としないが、名詞で未習のものは「はる」「さと」だけであるし、「きた」「さく」の常体形は、「きました」「さきました」の敬体形に直して説明すれば、意味は、容易に了解できるであろう。
日本の春の写真を、できればたくさん用意して見せ、迎春の気分を理解させるよう工夫されれば理

さとに さく。
のにも さく。

想的である。

えはがき (本文)

(2926 ページ)

えはがきが きました。
とうきょうの おばさんから きました。
さくらの はなの えはがきです。
わたしは、えはがきを よみました。
「はるこさん、みのるさん、おげんきですか。いま、にっぽんは はるです。
さくらの はなが、さいて います。
みんな、さくらの はなを みに いきます。
おとうさんと おかあさんに

(語句)

- ・えはがき
- ・さくら
- ・おげんきですか
- ・いま
- ・はる
- ・よろしく
- ・さようなら
- ・(一年下単元8のま とめに既出)
- ・(いま)
- ・たい(です)
- ・おげんきで
- ・(文型・文法)
- ・(み)に いきます
- ・へんじを かきます
- ・いきたいです
- ・みたいです

よろしく。さようなら。」
わたしは、おばさんに
へんじを かきました。
はわいの うみの
えはがきに かきました。
「おばさん、
えはがきを
ありがとうございます。
にっぽんの さくらは
きれいですね。
わたしは にっぽんへ
いきたいです。そして、
さくらの はなを
みたいです。
では、おげんきで。
さようなら。」

(ア) えはがき
実物で示す。宛名を書く所、文を書くところも教える。

「えはがきが きますか。」
「どこから きますか。」
「だれから きますか。」
「えはがきを かきますか。」

「だれに かきますか。」
などの質問をして理解を確認すると同時に、
「くから きますか」「くに かきますか」の形の練習も
する。

(イ) さくらの はなの えはがきです。

桜の花の絵葉書を示して、この文章を言う。

その他、いろいろの絵葉書を示して、

「にっぽんの やまの えはがきです。」

「はわいの まちの えはがきです。」

「はいびすかすの はなの えはがきです。」

「らいおんの あかちゃんのエはがきです。」

のように説明し、次に生徒に絵葉書を示して説明させる。

(ウ) えはがきを よみました。

「えはがきが きました。」

「えはがきを みますか。」

「はい、みます。」

「えはがきで とりを おりますか。」

「いいえ、おりません。えはがきを よみます。」

「えはがきを よむことが できますか。」

「はい、できます。」

など、自問自答してみせてから質問をする。

(エ) おげんきですか

○最初「げんき」の意味を理解させる。元気にあそんで

いる子供の絵や写真、スポーツの選手の写真などを示して、

「この ひとは、げんきです。」
と提示する。

病気の人や、つかれている人の絵や写真を見せて、

「この ひとは げんきでは ありません。」

と、対象させれば意味をはっきりとらえる助けになる。

また、

げんきな こども

げんきな いぬ

などの形も提示する。

○次に、

「あなたは げんきですか。」

と生徒に質問して、

「はい、げんきです。」

「いいえ、げんきでは ありません。」

どちらかの答を教師が助けながら導き出して、この質問の意味を理解させる。

○手紙、はがきに書く場合に先方の健康を聞くのに「お元気ですか」と「お」をつけるというように説明する。

※「お」が目上に使う尊敬表現であることにはこの場合ふれない。「目上」という観念が児童にむずかしく、使い分けに混乱をおこすことを避けるためである。

(オ)いま

絵を見せながら、

「いま、あさです。」

「いま、ひるです。」

「いま、べんきょうして います。」

「いま、たべて います。」

などの例で理解させる。

「いま、はるです。」

も絵や写真を示しながら理解させ、冬や夏の絵を見せて、

「いま、はるですか。」

「いいえ、はるでは ありません。」

の形も言わせる。

「いま、ほのるるは よるです。」

「いま、ふじさんは あさです。」

なども写真などで示し、生徒にも言わせる。

(カ)さくらの はなが さいて います。

いろいろの花の写真を示して、この文章の形で言わせて練習する。

(キ)しを みに いきます

わたしは いきます。

そこで、 さくらを みます。

わたしは、 さくらを みに いきます。

わたしは いきます。

そこで、あさごはんを たべます。

わたしは、あさごはんを たべに いきます。

わたしは いきます。

そこで、にっぽんごを べんきょうします。

わたしは、にっぽんごを べんきょうしに いきま

す。

わたしは いきます。

そこで、れこうどを ききます。

わたしは、れこうどを ききに いきます。

などの例文を示して、この語の成り立ちを生徒に会得

させる。また、

「すいぞくかんへ なにを しに いきますか。」

「さかなを みに いきます。」

「どうぶつえんへ なにを しに いきますか。」

「どうぶつを みに いきます。」

「こうえんへ なにを しに いきますか。」

「あそびに いきます。」

「がっこうへ なにを しに いきますか。」

「べんきょうしに いきます。」

「うみへ なにを しに いきますか。」

「およぎに いきます。」

のような質問の形と答を、教師が自問自答で提示し、
じゅうぶん聞かせてから、今度は生徒に質問して答え
させる。

(ウ)おとうさんと おかあさんに よろしく

別れる時や、手紙、葉書のあとに、相手の人の家族に
対して言伝てるあいさつのことばであるという程度に
理解させる。とくにこの語の意味は説明する必要はな
い。

「では、さようなら。おかあさんに よろしく。」

「さようなら、にいさんに よろしく。」

など、いくつか例を示す。生徒に言わせて練習する必
要はないが、葉書を書かせる練習の場合にはこの言い
方を取り入れさせてみるほうがよい。

(ケ)この葉書の文を生徒に朗読させ 正しく読めるよう指
導する。

(コ)へんじを かきました。

「へんじ」は二年上単元1「うさぎと かぜ」に「へ
んじを しません」の形が既出。「へんじを する」
は口頭で答えることであり、「へんじを 書く」は手
紙、葉書のへんじを書きしるすことであることを、

「へんじを して ください。」

「へんじを かいて ください。」

といって生徒に動作をさせるよう誘導して理解させ
る。

「はるこさんは、へんじを かきましたか。」

「はい、へんじを かきました。」

「おじさんに へんじを かきましたか。」

「いいえ、おばさんに へんじを かきました。」
「はるこさんは、だれに へんじを かきましたか。」
「おばさんに へんじを かきました。」
のように教師が自問自答して示し、次に生徒に質問する。ことに「しに へんじを かく」の形を徹底させる。

(サ)はわいの うみの えはがき

図示。

「とうきょうの まちの えはがき」

「はわいの やまの えはがき」

「あめりかの かわの えはがき」

などいろいろの絵葉書を用意して生徒に見せていわせる。

「はるこさんは、にっぽんの うみの えはがきにかきましたか。」

のような質問で、この文章を言わせる練習をする。

(シ)えはがきを ありがとうございます

「ありがとうございます」は既出であるが、「えはがきを——目的語につく助詞——に注意させる。「おくりものを ありがとうございますました」「おひなさまをありがとうございますました」などの形を、いろいろのものを生徒にあたえたこととして言わせてみる。この語は何かもらった時や、してもらったあとで感謝のことばとして述べる語であるが、まだ受け取らぬ場合、行

動しない事前の場合は「ありがとうございます」と現在形になり、時々事後にも「ありがとうございます」と現在形でいう場合もあるが、ここでは生徒が混乱を起さぬよう、何かいただいた時には「ありがとうございますました」というのだというように指導しておく。

(ス)にっぽんへ いきたいです。

さくらの はなを みたいです。

「したい」は want の意であることを英語でちょっとヒントするのがこの場合は手取り早い方法である。生徒に一応意味の理解がついたら、

「どうぶつえんへ いきたいですか。」

「はい、いきたいです。」

「では、いきましよう。」

「あさごはんを たべたいですか。」

「はい、たべたいです。」

「では、たべましよう。」

「ふじさんの えはがきを みたいですか。」

「はい、みたいです。」

「では、みましよう。」

のように自問自答の例文を示し、理解を固める。次に、

「あなたは、なにを みたいですか。」

「あなたは、なにを たべたいですか。」

「あなたは、どこへ いきたいですか。」

のような質問を生徒にして、「したい」ものを挙げさせれば意味がもっと明確にとらえられるようになるう。

この場合、

※「なにを」「どこへ」は具体的な答が期待されるので練習のために効果的であるが、「いつ」「したいですか。」

「だれと」「したいですか。」「どこで」「したいですか。」のような質問は、かなりむずかしくなるから、「したい」を理解させ、練習させるためには不適當である。

「したい」がじゅうぶん理解できたところで生徒に余力があれば応用型としてあたえる程度にする。

「いっぱい(その他、いろいろのところ)へ」「いきたいですか。」

「さくらの はな(その他、いろいろの花)を」「みたいですか。」

の質問に答えさせてじゅうぶん練習する。

「したい」の打消形は、「したくは ありません」で、この形は、すでに形容詞の打消形を習っているこの段階としては、これと関係づけて教えることは可能であろう。生徒が「したい」形に非常に抵抗がありむずかしがる場合は肯定形だけにとどめておいて仕方がないが、質問の成行きで、どうしても否定形を使いたい場合も予想されることであるし、多少無理でも肯定否定

両形を与えるほうが練習操作には便利である。否定形の練習はどうしても否定形を使わざるを得ないような質問をして誘導する。例えば、

「あなたは きょうそうします。まけたいですか。」

「かきの たねを たべたいですか。」

「きから おちたいですか。」
など。

(セ)では、おげんきで。

これも手紙、葉書のおわり、(またはわかれる時)にいうことばであることに注意させ、葉書を書かせる練習の時に使わせるよう指導する。相手の健康をねがう意味であることをとくに説明する必要はないが、場合によっては理解させればなおよい。

(シ)返事の文を朗読させ、読み方指導をする。

(ク)教師が読本に近いえはがきの文を作って、黒板に書き、その返事を生徒それぞれに書かせる練習をする。

生徒にまとめる力がない場合は、返事の文をいくつかの章節にわけて誘導していわせ、最後に一つのまとまった文章にさせる。

(ハ)ハワイのようすを日本の友達に知らせるえはがき(その文に使用できそうなえはがきをあらかじめ選んで生徒にあたえる)を書かせる。いきなりまとめることができないう場合には、(ク)と同様文を分けて指導する。

まとめ

(一)「いま」ということばはかなり巾の広い時間を指しあ
らわすことばで、春夏秋冬の季節、朝昼晩の時間、一
時、二時などの時刻、すべて「いま」であらわされ
る。それをある程度生徒に納得させること。また「い
ま(場所)はここです」の形の文章の練習をさせること
も目的である。

教師が、「いま 頃は……」と言いきさして下を生徒
につけさせるような形で練習をする。絵、写真などを
示しながら、これを行う。

(二)「したいです」の形を徹底して練習させる。既習の動
詞の「したい」形を機械的にくりかえさせる練習と、
問答に採り入れてする練習とを交互にする。できれば
否定形もこれに加える。最後には「あなたは なにを
したいですか」の質問で、生徒が、様々の希望を文章
に形作る応用練習に発展できれば非常によい。

(三)てがみのことばの練習。これは手紙を実際に書かせる
ことで、その中で使わせ練習させるのが効果的であ
る。

練習問題

(一)ことばを入れなさい。

さくらの はな | えはがき |、とうきょうの おば

さん | きました。
わたしは おばさん | へんじ | かきました。
おとうさん | いっしょ | さくらの はな | み |
いきました。
にっぽんの やま | のはら | さくらの はな |
さいて います。
わたしは どうぶつえん | いき | です。

(二)適当なことばを選んで入れなさい。

おじさん

ですか。

きれいな えはがきを

_____。

ふじさんは _____ やまですね。

わたしは にっぽんへ _____ です。

そして、

ふじさんに _____ です。

きょう、わたしは

うみへ _____ に いきます。

おばさんに _____。

では _____。 さようなら。

おげんきで。たかい。およぎ。ありがとうございました。
た。よろしく。いきたい。おげんきですか。のぼりた
い。

(三)この手紙はおばさんから来ました。読んで返事を書き

なさい。

ゆきこさん、おげんきですか。

たんじょうび おめでどう。

この にんぎょうは おくりものです。

きょう、にっぽんは「おひなさまの ひ」です。

うちには おひなさまが ならんで います。

おとうさんと おかあさんに よろしく。

さようなら。

(四)この手紙はおじさんから来ました。読んで返事を書きなさい。

たろうさん、

おげんきですか。

いま、にっぽんは あきです。

かきの みが なって います。

みんな かきの みを たくさん たべます。

それから、

みんな やまへ あそびに いきます。

では、おげんきで。

さようなら。

(三、四、については読みの指導、理解の指導をじゅうぶん行っただうえで返事を書かせるようにする。)

単元4 はなしします

一、指導の時期

四月。後半二週間を当てる。

二、指導の時間数

本文指導 二課を約七時間

まとめ 二時間

練習問題 一時間

計十時間

三、この単元の趣旨

ことばの指導においては「話す」能力がその中核をなすものであり、ことに低学年においては、「話す」能力をつけ、伸ばすことにより集中的に力がそそがれます。この段階までに児童は、とにもかくにも、自分たちが得たことばを組み立てて、自分の考えを発表するように訓練され、少くとも一つの質問に対して何らかの形の反応をことばで表わす訓練はかなり進んでいます。これに対して、ここで特に「話します」という単元を設定し

たのは、生徒が問いかけに対して反応するという受身の話し方からさらに一歩進んで、自分の考えなり意志なりを自分からことばに形作っていくような、もっと積極的、創造的な話し方指導に、この段階あたりからそろそろ取りかかってよいのではないかという配慮によるものです。教師に誘導されずに、はじめから自分でまとめた話をつくる——そうした力の養成へ向かうための手はじめとしてこの単元があるわけです。ですから、ここでは、生徒の体験に根ざしたいろいろの発表を、——それが完全な文章になっていなくても、とにかく生徒が、ことばを並べて発表する意欲を持つよう興味をもたせ勇気づけるように——指導することが目的になります。「いすたあの やすみ」はこの一つのあり方として提出されたものです。時期が、ちょうど復活祭にあたり、休日にはいって、二月、三月と持続して来た緊張がふっとゆるむ期間でもありますから、ここまでの総復習のつもりで、手広く、じっくりと、生徒から話を引き出すようにしていただきたいのです。その意図もあって、この単元では新しい文法、文型はなく、新出語も二三のもので押えています。「話させる」単元ではありませんが、いわゆる口頭作文の指導にあたるわけで、話させたことは必ず筆記させ、作文指導の第一段階につながるよう配慮されればいっそう結構です。

四、学習指導の要点

○文型、文法の復習として、

なにを しましたか。

はなして ください。

にっぽんから おじさんが きました。

むかえに いきました。

おじさんの うちには ばいナップるの はたけが

あります。

たまごを やりました。

○発表意欲を刺激するために、

①特別の出来事があったかどうかを具体的な事項をあげて質問する。例えば、

「だれが(なにが)——えはがき、こぶつみなど——きましたか。」

「どこへ いきましたか。」

「なにを みましたか。(たべましたか。ききましたか。など)」

「おかあさんは(その他の家族または飼っている動物など)なにを しましたか。」

など。

②生徒が経験したことについて感想を述べる手がかりとなるようなことばをあたえる。例えば、

「きれいですか」「すきですか」「げんきですか」

「かわいいですか」「はやいですか」「おとなしい

ですか」「おこりましたか」「おどろきましたか」など。

○話を構成させるために、

①何があったか。

②生徒がそれに対してどうしたか。

③生徒がそれに対してどう感じたか。

の順に聞いてみて、それを一つの文章にまとめさせる。

五、学習指導の展開

いいすたあの やすみ

(本文)

せんせいが いいました。

「いいすたあの やすみに、

なにを しましたか。

はなして ください。」

なつおさんが

はなしました。

「にっぽんから

おじさんが きました。

わたしは、おとうさんと

ひこうじょうに

むかえに いきました。」

3532
ページ

(語句)

・ひこうじょう

・むかえ(に いきました)

・ばいナップる

・はたけ

(文型・文法)

・さんびき うまれ

ました(一年上単

元8既出)

いさむさんが
はなしました。
「おじさんの うちへ
あそびに いきました。
おじさんの うちには
ばいナップるの
はたけが あります。
ばいナップるを
たくさん たべました。」
はるこさんも
はなしました。
「ねこの あかちゃんが
うまれました。
さんびき うまれました。
わたしは、
ねこの おかあさんに
いいすたあの たまごを
やりました。」

(ア) いいすたあの やすみ
「この やすみ」の形をいろいろ提示する。

クリスマス の やすみ。
はるの やすみ。
なつの やすみ。

ふゆの やすみ。

「やすみ」ということばの復習。

きょうは やすみですか。

あしたは やすみですか。

にちようびは やすみですか。

どようびは やすみですか。

いつ やすみですか。

などの質問に答えさせる。

(イ) なにを しましたか

復習をする。

きのうは なにを しましたか。

きょう(あした、にちようびなど)なにを しますか。

などの質問で練習。現在、過去、未来の意識を明確に

持たせて答えられるようにする。

(ウ) はなして ください

復習。(イ)と一緒に質問して答えさせるとか、教師が一

連の動作をして何をしたか答えさせるようなことをし

て練習させる。

(エ) にっぽんから おじさんが きました。

くが きました。

くから きました。

の二つの文章の形を一つにする練習をじゅうぶんさせ

る。

(オ) ひこうじょう

図示。

「ひこうじょうへ いきましたか」の質問で練習。

(カ)むかえに いきました。

自分のところへ来る者を、駅、港、飛行場または道の途中まで出て行って、一緒にもどる意であることを例文で理解させる。

おじさんが ひこうじょうに きます。

なつおさんは ひこうじょうに むかえに いきます。

おばさんが くえきに きます。

××さんは くえきに むかえに いきます。

おじいさんが くの(みなと)に きます。

〇〇さんは みなとに むかえに いきます。

おかあさんが まあけつとから かえります。

△△さんは ひろい みちに むかえに いきます。

□□さんが がっこうから かえります。

いぬは(もん)に むかえに いきます。

など。

※生徒に余力があれば、「むかえに きます」もいっしょに教えてよい。

「なつおさんは どこに むかえに いきましたか。」

「だれを むかえに いきましたか。」

「なつおさんは なにを しに いきましたか。」

の質問で内容の理解を整然とさせる。

(キ)おとうさんと。いきました。

復習。

「なつおさんは おとうさんと いっしょに いきましたか。」

「なつおさんは おとうさんと いきましたか。」

の二つの質問をならべて提示し、同意であることを確認させたうえで、

「なつおさんは みのるさんと(おかあさんと、おじいさんと、など) いきましたか。おとうさんと いきましたか。」

「なつおさんは だれと いきましたか。」

などの質問をする。

(ク)わたしは おとうさんと ひこうじょうに むかえに いきました。

この長い文章が正しく言えるように練習させる。

まず、

「だれと いきましたか。」

「どこに いきましたか。」

「なにを しに いきましたか。」

の三つの質問にわけて答えさせ、最後にこれを一つに

させていわせる練習を繰り返す。

(ケ)おじさんの うちへ あそびに いきました

まず「いさむさんも むかえに いきましたか。」

「いさむさんは みに(たべに、ききになど) いきましたか。」

「いきむさんは なにを しに いきましたか。」
などの質問をする。次に、

「おじいさんの（おばあさんの、おばさんの、ともだちのなど） うちへ いきましたか。おじさんの うちへ いきましたか。」

と質問して答えさせ、この二つの質問の答を一つの文章に作るよう誘導して言わせる。

(㉔)ばい なっふる

図示。

ばい なっふるの き。

ばい なっふるの はな。

ばい なっふるの み。

などの形も提示。

「あなたの うちに ばい なっふるが ありますか。」

「どこに ありますか。」

「はなが さきますか。」

「みが なりますか。」

「ばい なっふるが すきですか。」

などの質問で練習する。

(㉕)は たけ

図示。

町、ひろい道、海、などの絵を見せて、

「これは はたけですか。」

と質問して理解を確認する。

「この はたけ。」
の形も提出する。

「あなたの うちには はたけが ありますか。」

「なんの はたけですか。」

などの質問で練習する。

(㉖)おじいさんの うちには ばい なっふるの はたけが

あります。

「この うちには が あります。」の形の復習を

する。

「あなたの うちには……」

と教師が言いさして生徒にあとを続けて言わせるよう

な方法で練習をする。

(㉗)ばい なっふるを たくさん たべました

「なつおさんは かき（りんご、ばなな）を たべま

したか。ばい なっふるを たべましたか。」

「ばい なっふるを たくさん たべましたか。すこし

たべましたか。」

などの質問で練習する。

(㉘)うまれました

一年下単元8「ももたろう」に既出。

いろいろの動物の名前を教師が挙げて、

「この あかちゃんが うまれました。」

の形を生徒に言わせる。

(㉙)さんびき うまれました

「——が——びき——ます(ました)。」

の形の練習。数詞が副詞的な役割で動詞の上に来る場合には助詞をとらぬことを、例文を示すことと、生徒に言わせる作業の中で自然に身につけさせる。

※「さんびきがうまれました。」とか「ろくにんがいます」のような言い方をせぬよう注意する。

「ねこが いっぴき(にひき、しひき、ごひき……)うまれましたか。さんびき うまれましたか。」

「ねこが なんびき うまれましたか。」の質問で練習する。

また、ここでもう一度、ものを数える場合のことは、「ひとつ ふたつ……」「ひとり ふたり……」「いっぴき にひき……」の総復習をあわせてしておく。

(メ)ねこの おかあさん
この おかあさん(おとうさん、あかちゃん)の形の復習。

(チ)くを やりました。
くを あげました。

この二つを対照させて思い出させ、じゅうぶん復習をする。教師が、

せんせいに……
いぬに……
などと言いさして、あとの動詞が「やります」か「あげます」かを生徒にえらばせてつけさせる方法で練習

する。

(ツ)わたしは ねこの おかあさんに いいすたあの たまごを やりました。

はるこさんは、なにを やりましたか。

だれに やりましたか。と質問して、最後に一つの文章にまとめて言わせる練習をする。

(テ)「あなたは いいすたあの やすみに なにを しましたか。はなして ください。」の質問で、生徒にそれぞれした事を話させる。部分部分で誘導して話させ、最後にまとめさせるように指導する。

(ト)それぞれ話したことをノートに書かせて提出させる。教師はじゅうぶんそれに目を通して訂正し、まちがいが多い場合には、もう一度教室で取り上げて練習する。

もりの こやぎ (作詩 藤森秀夫 作曲 本居長世) (3736 ページ)
語句、文型、文法ともに指導の対象とせず(ことに、この歌には、「あんよ」などの幼児語、「あたりや」などの俗語があるので、注

めえ、めえ。
もりの こやぎ。
もりの こやぎ。

こやぎ はしれば、
 こいしに あたる。
 あたりゃ あんよが
 あ いたい。
 そこで、
 こやぎは
 めえ と なく

意されない) 歌として生徒に指導する。
 ただし、「やぎ」は図で示し、「こやぎ」がこの子供であることは理解させる必要はあろうし、「いたい」などは基礎語彙として教えるてもよいであろう。

「これは こやぎです。」 図示。
 「この こやぎは もり (図示) に います。」
 「こやぎは はしります。」
 「こやぎは いしに ありました。」
 「こやぎは あしが いたいです。」
 「こやぎは なきました。」
 「こやぎの なきごえを しって いますか。」
 「めええと なきます。」
 のような形で、意味を紹介することも出来よう。

まとめ

(一) 既習の、さまざまの場所を挙げ、そこで何をするか話させる。読本のは一例である。

「なにを しますか。」
 の質問の練習がじゅうぶんできたなら、

「なにを しに いきますか。」
 の形もいっしょに練習できればさらによい。

(二) 前単元に引続き「くに きました」の形をじゅうぶん練習する。この単元で新出の「むかえに きました」の理解と練習をまず徹底させ、そのうえでほかの動詞のものももう一度繰り返して復習する。

(三) 「やりました」の意味を徹底させ、練習を行う。さらに「あげました」のほうの練習もあわせて行う。また、「やりました」「あげました」を使う場合の完全な文章の形として、

「——は ——に ——を
 あげました。
 やりました。」

を正しく言えるように、

「だれが あげましたか。
 やりましたか。」

「だれに あげましたか。
 やりましたか。」

「なにを あげましたか。
 やりましたか。」

と分けて質問をし、そのあとで一つの文章にまとめさせる練習をする。

練習問題

(一)うちへ来たお客様について話させる。

○だれが きましたか。

○あなたは なにを しましたか。

(二)どこかへ行ったことについて話させる。

○あなたは どこへ きましたか。

○いつ きましたか。

○なにを しましたか。

(三)うちにいる動物について話させる。(動物がいない場合)

合は家族について話させる)

○あなたの うちに ねこ(いぬ、うさぎなど)が

いますか。

○ねこ(いぬ、うさぎなど)は なにを して いま

すか。

○あなたは ねこ(いぬ、うさぎなど)に なにを

しますか。

(四)動詞をつけなさい。

なにを _____。

どこへ _____。

だれが _____。

いつ _____。

はなして _____。

むかえに _____。

(五)数詞を入れなさい。

ねこの あかちゃん(3) _____ うまれました。

さかな(2) _____ およいで います。

おきやくさま(5) _____ きました。

りんご(7) _____ ならべました。

あかい はな(9) _____ さきました。

がっこうに せんせい(10) _____ います。

※えんぴつ(8) _____ あります。

※あおい かみ(6) _____ ください。

(※印は未習。生徒によってあたえる)。

(六)助詞を入れなさい。

おじさんの うち _____ ぱいなっふるの はたけ _____

あります。

わたし _____ ねこの おかあさん _____ いいすたあの た

まご _____ やりました。

わたしは おとうさん _____ ひこうじょう _____ おじさん

_____ むかえ _____ きました。

単元5 れい

一、指導の時期

五月。前半約二週間半を当てる。

二、指導の時間数

本文指導

二課を約十時間

まとめ

約二時間

練習問題

約一時間

計十三時間

三、この単元の趣旨

この単元を学習する時期に、ハワイでは「れいデー」の行事があることにちなんでれいを題材とした単元を設定しました。世界的名物であるハワイの美しいれいは、すでに一年下単元6「しろい れい」、二年上単元3「たんじょうび」でたびたび取りあげてきましたが、この単元は、「れいの ひ」の作文がひとつ、れいを題材にした童話がひとつで構成され、教授目標としては作り、書

く、作文教材と、読み、話す、読み方教材と二本立てになっておりますし、内容的には現実生活におけるれい、夢想の世界におけるれいの両面が提出されているわけです。生徒が日本語に馴れ、それを自分のものとして使いこなして、自分の生活をどんどん日本語で発表する意欲と力を現実に養うことと同時に、そういう実用面をややはなれて、読本を日本語で書きあらわされた「おはなしの本」として楽しむ、このような性格も、ことに低学年の読本には持たせたい意図もあって、絵の楽しい童話も提供しております。単元3、4が作文教材（もちろん口頭作文ですが）のかたよりを持っていただけに、この単元ではすこし生徒をたのしませながら、お話をあじわうふんいきを持たせるようお願いいたします。また、たのしいうつくしい行事である「れいデー」を日本語学校でも取り入れて生徒にれいをさせたり、れいをかざらせたりして、その経験を、また日本語で話させ書かせて、実際の教材にするよう工夫していただきたいと思います。

四、学習指導の要点

○色についての総合的復習。ことに形容詞形のものど名詞形のものとの区別を整然とさせ間違えないように訓練する。

○「——て いきます」「——て きます」「——て い

ます」の再確認、再復習。生徒の頭の中で明確に区別され、混乱なく言えるところまで練習する。

○この単元は新出の動詞が多い。「(れいを) かける」

「(れいを) つつく」「(あたまに) はまる」など、また「こまる」「ほめる」「りっぱな」など抽象的な意味の語も多く提出されているので生徒に理解させやすいよう教師は提示に工夫することが肝要である。

○「この ようです」の文型を練習させる。

○いろいろの行事について、どんな事をするか説明させ、かなりまとまった話ができるよう指導する。

五、学習指導の展開

れいの ひ

(4140 ページ)

(本文)

きょうは 「れいの ひ」です。
みんなが、れいを
かけます。
わたしは、がっこうへ
れいを かけて
いきました。
あかい はなの れいです。
はなこさんは、

(語句)

- ・(れいの) ひ
- ・かけ(ます)
- ・いちろう(さん)
- (文型・文法)
- ・あかい はなの れい
- ・(きれい) でした

もいろいろの れいを
かけて きました。
いさむさんと
いちろうさんは、
しろい れいを
かけて きました。
せんせい、
きいろい れいを
かけて きました。
みんな たいへん
きれいでした。

(ア) れいの ひ

こどもの ひ。

この ひ。

の例をできるだけ示す。

いろいろの日の絵や写真を見せて、

「きょうは なんの ひ ですか。」

の質問に答えさせて練習する。

(イ) (れいを) かけます

教師が動作で示し、「かける」の意味を理解させる。

かばんを かけます。

(オーバーコート)を かけます。

なども示し、必ずしも首にかける場合だけでないこと

も理解させる。

(ウ) みんなが、れいを かけます。

「れいの ひに なにを しますか。」

の質問をして、

「みんなが、れいを かけます。」

と答えさせる。この他、

「こどもの ひに なにを しますか。」

「みんなが、こいのぼりを たてます。」

「おひなさまの ひに なにを しますか。」

「みんなが、おひなさまを ならべます。」

「いいすたあに なにを しますか。」

「みんなが いいすたあ の たまごを つくります

(かくします、さがしますなど)。」

「かんしゃさいの ひに なにを しますか。」

「みんなが ごちそうを たべます。」

などの問答をして練習する。

(エ) がっこうへ れいを かけて いきました。

「れいの ひに がっこうへ れいを かけて いき

ますか。」

と質問してみる。すぐこの質問が無理のようなら、

「わたしは、がっこうへ いきましたか。」

「わたしは、れいを かけて いきましたか。」

と分けて質問して答えさせてからまとめて一つの文章にする練習をする。

(オ) あかい はなの れい

「赤い花で作った」れいであることを、いろいろのれいを見せて、

しろい はなの れい。

きいろい はなの れい。

ももいろの はなの れい。

などと提示する。また、

しろい かみの はこ。

ももいろの かみの にんぎょう。

あおい(がらすの)まど。

きいろい つみきの うち。

などの例も提示する。

「くさんの れいは、しろい(あおい、きいろい、も

もいろのなど)はなの れいですか、あかい はな

の れいですか。」

と質問して練習する。

(カ) かけて いきました。

かけて きました。

かけて いきました。

の三つの形が並んでいるから、状況をよく納得させて、どういう場合にこの形があてはまるかを理解させ、場面をつくって練習させる。

(キ) それぞれの子のれいがどんな色だったか、子供の名をすばやくあげてれいの色をいわせるような練習をする。

る。

また、読本以外の色々のれいをかけた子供の絵をつくり、それぞれに名前をつけて、あれこれ示しながらどんな色のれいかいわせるような練習も効果がある。

※この場合、教師の誘導が適当なら、「はなこさんは？」「いさむさんは？」と子供の名を挙げるだけで、生徒はれいの色をつられて言うようになるが、何を言わせられるのか生徒が納得しない場合は「はなこさんのれいはどんないろですか。」と質問しなければならぬ。しかし、まだ「どんないろ」は未出であるから、「はなこさんのれいのいろはなんですか。」のようなぎこちない形の質問しかできず、この形は、あまり生徒の耳に残したくないので、できるだけ、教室作業を円滑に運んで、子供の名を教師が呼びあげるだけで、その子のかけているれいの色を生徒が反射的に答えるような誘導の仕方がこのましい。

(ウ)きれいでした

「きれいです」の過去形としての「きれいでした」の提示。

「きのう さくらの はなを みました。」

「きれいでした。」

「いま さくらの はなをみて います。」

「きれいです。」

などのような形で提示して、過去であることを理解さ

せる。

同時に、

じょうずでした。

げんきでした。

しずかでした。

などのことばを使った例文も示す。

生徒の力によるが、

おとなしいでした。

すずしいでした。

などの形容詞「〜です」の過去形や、

「きのうは にちようびでした。」

「きのうは やすみでした。」

のように名詞の「〜です」の過去形も、いっしょに提

示できれば、練習の中もひろがり好都合である。

「〜です」「〜でした」

両方の答を誘導するような質問をまぜてして、現在形、過去形が使い分けられるよう訓練する。

「きのう がっこうは やすみでしたか。」

「はい、やすみでした。」

「では、がっこうは しずかでしたか。」

「はい、しずかでした。」

「きょうは すずしいですか。」

「はい、すずしいです。」

「きのうは すずしいでしたか。」

「はい、きのうも ずずしいでした。」
「きょうより ずずしいでしたか。」
「はい、きょうより ずずしいでした。」
などのような形で問答をする。

※「くでした」の否定形として「では ありませんでした」「くは ありませんでした」の形があるが、ここまで一度に拡げて教えこむことは無理であろうから肯定形だけにとどめる。したがって、質問も、肯定形を予想した形のものだけ用意するよう、あらかじめ注意しなければならぬ。

(ケ) 「れの ひ」に なにを しますか。
の質問で、生徒各人がどんなことをするか答えさせる。

「あかい れいを かけたいですか。」

「れいを だれが つくりますか。」

「れの ひには ごちそうを たべますか。」

などの応用質問を工夫して、生徒が活発に話せるよう誘導する。

れいと いるか

(4542 ページ)

(本文)

きせんが、うみを

(語句)

・ いるか
・ きせん

はしって いました。
その きせんから、
れいが、ひとつ
うみに おちました。
あたらしい きれいな
れいです。

「おや、これは

なんででしょう。

ごちそうでしょうか。」

いるかが、れいを

つつきました。

れいは、

いるかの あたまに

すっぽり

はまりました。

いるかは

こまりました。

けれども、

ほかの さかなは

ほめました。

「いるかさん、

りっぱですね。

おおさまの ようです。」

いるかは

- ・ つつき (ました)
- ・ すっぽり
- ・ はまり (ました)
- ・ こまり (ました)
- ・ ほかの
- ・ ほめ (ました)
- ・ りっぱ (です)
- ・ おおさま
- ・ よう (です)
- ・ げんきよく
- (文型・文法)
- ・ あたらしい きれいな
- な れい
- ・ おおさまの ようです

よろこびました。
そして、
げんきよく
およいで
いきました。

(7) きせん

絵、写真で示す。既習の「ふね」に対して、かなり大きいものとして理解させる。
きせんが うみを はしって います。
じどうしゃ(ばす)が みちを はしって います。
ひこうきが そらを とんで います。
などの文章の形を、絵を見せながら言わせて復習する。

(4) その きせんから、れいが、ひとつ うみに おちました。
まず、

「れいが おちました。」

「れいが、ひとつ おちました。」

「きせんから れいが、ひとつ おちました。」

の順で、絵を書きながら提示。次に、

「なにが おちましたか。」

「いくつ おちましたか。」

「どこから おちましたか。」

の質問に答えさせる。最後に長い文をまとめて言わせ

る練習をする。

べつに「おちました」の復習のため、教師はいろいろのものを落して、生徒に、

「——が おちました。」

「××から ——が おちました。」

と言わせる。

(6) あたらしい きれいな れいです

形容詞が名詞の上に重なる形の提示。これはやたらに使わせると、奇妙なものができあがる場合があるから、あまりしつこくは練習しなくてよい。

ひろい しずかな こうえん。

かわいい げんきな こども。

せまい あぶない みち。

あたらしい おいしい くだもの。

などを提示して、

「これは ひろい しずかな こうえんですか。」

のような質問に答えさせて練習する。

※この場合、答えが否定形にならぬよう質問を用意する。

(5) なんでしょう

ごちそうでしょうか。

問いかけの「しょう」形は二年上単元3 「わたしは

なんでしょう」既出。復習として、教師がさまざまの

ものを示して、

「これは 为什么呢。うや」

「ほんでしょうか。」
などの質問をする。

(㊦) いるか

絵、写真でしめす。

「いるかを みましたか。」

「どこで みましたか。」

「いるかは さかなですか、どうぶつですか。」

「いるかは やまに いますか、うみに いますか。」

などの質問で理解をたしかめ練習する。

(㊧) つつきました。

教師が動作で示す。

「××を つつきました。」

「××を 手で(えんぴつで、ナイフでなど) つつきました。」

などで提示し、

「いるかは なにを つつきましたか。」

「いるかは てで つつきましたか。」

などで質問して、理解をたしかめ、考えさせてみる。

(㊨) はまりました

れいのはまったいるかの絵で大体理解させたうえで、指輪、うでわなどいろいろの輪を用意して、いろいろのものにはめて示し、

「てに はまりました。」

「あたまに はまりました。」

「あしに はまりました。」

「たまごに はまりました。」

などと言って理解させる。

「れいは いるかの あし(て、くび、はななど)に

はまりましたか。」

「れいは いるかの どこに はまりましたか。」

の質問で練習。

(㊩) すっぽり

適当によくはまった時の形容として、じゅうぶんはめて見せて、

「すっぽり はまりました。」

少しはめて見せて、

「すこし はまりました。」

などとして理解させる。とくに生徒にいわせなくてもよい。

※「すっぽり かぶる」とか、「すっぽり はいる」

とかいう意味のものに拡げる必要もない。

(㊪) こまりました

生徒の立場で困ると考えそうな場面を提出して意味を推察させる。

「えんぴつが ありません。」

「あちらこちら さがしました。」

「けれどもありません。」

「こまりました。」

「あかちゃんが なきました。」

「おかあさんが いません。」

「こまりました。」

「おじさんは につぼんごで ききました。」

「あなたは わかりません。」

「こまりました。」

「かきの みが なりました。」

「かには きに のぼる ことが できません。」

「さるは こまりました。」

「さるさんは くだもの のごちそうを だしまし

た。」

「まひまひさんは たべる ことが できません。」

「まひまひさんは こまりました。」

など。大体生徒が理解したところで、

「いるかは れいを とることが できましたか。」

「いいえ、とる ことが できません。」

「いるかは こまりました。」

と自問自答しながら説明する。

練習のほうも生徒が困りそうな場を提供して、

「あなたは こまりますか。」

としつもんして 「こまります」 「こまりません」 を答

えさせる。

(二)ほかの

いるか以外の魚を指して、

「ほかの さかなです。」

と提示する。

いろいろの絵によって、

「この ほんは あかいです。」

ほかの ほんは あおいです。」

「この こどもは たって います。」

ほかの こどもは あるいて います。」

のように示して理解させる。

(三)ほめました。

「——を ほめました」の形を教える。教師は、

「××さん、あなたは につぼんごが じょうずです

ね。」

といい、

「わたしは、××さんを ほめました。」

と提示する。生徒をなんんかほめて、この操作をくり

返して理解させる。ほめることばとして、

じょうずですね。

きれいですね。

かわいいですね。

しずかですね。

おとなしいですね。

げんきですね。

など、いろいろあることを、ほめる時の例文にこれらのことばを使ってみせることで理解させる。生徒が理解したら、

「××さん、△△さんを ほめて ください。」

というように誘導して、ほめさせることで意味を確認させる。

読本にもどり、

「ほかの さかなも こまりましたか。」

「ほかの さかなは おこりましたか。」

「ほかの さかなは よろこびましたか。」

「ほかの さかなは つつきましたか。」

「ほかの さかなは かんがえましたか。」

などの質問をして、

「いいえ、しません。ほめました。」

の形を言わせる。

(シ)りっぱです(ね)

「りっぱな」の形も提示する。

りっぱな建物、山、汽船、庭などの絵や写真を見せて、

「この ××は きれいです。」

「この ××は きれいです。」

「この ××は きれいです。」

「この ××は きれいです。」

などと並べ、

「この ××は りっぱです。」

と提示する。また軍人とか、王様とかのような人がりっぱな服装をしている絵などで示すのもよい。

※ただし「りっぱな人―偉人」のような観念のものはここでは提出しない。

練習は、りっぱでないものと、りっぱなもの両方示して、

「この ××は りっぱですか。」

と質問して答えさせる。また、

「これは りっぱな ××ですか。」

という形の質問もする。

(ス)おおさま

図示。

「あなたのおとうさんは おおさまですか。」

などの質問や、

「むかし むかし、はわいに おおさまが いました。いま いません。」

などの説明で理解させる。

(セ)の ようです

実際にそれではないが、それによく似ている意であることを、似ているものを挙げたり見せたりすることで理解させる。

「らいおんの あかちゃんは ねこの ようです。」

「かんがるうの おなかは(ぽけっと)の ようで

す。」

「くじらは、ふねの ようです。」
など。

生徒がこの形を理解したら、

「つきは なにの ようですか。」

のような質問に答えさせて練習する。

(㉑) いるかは、よろこびました

「よろこびました」は単元2 「らくだの みみ」に既出。復習をする。

「さかなたちは ほめました。」

「いるかは おこりましたか。」

こまりましたか。

たのみましたか。

なきましたか。

かんがえましたか。」

などの質問をして、

「いいえ、く ません。よろこびました。」

の形で答えさせる。

(㉒) そして

「それから」と同じような意味であるという程度に理解させておく。

(㉓) げんきよく

「いるかは、はじめ こまりました。」

「けれども、いま よろこびました。」

「いま、げんきです。」

「げんきよく およいで いきました。」
のように説明する。

元気よく人が歩いている絵や、子供があそんでいる絵

などを用意して、

げんきよく あるいて います。

げんきよく あそんで います。

などの例も提示する。

※ 「げんきよく」は副詞用法だけ教えておく。

「××は、げんきが いいです」のような形に直して教える必要はない。

生徒が理解したら、

「あなたは、げんきよく がっこうへ きますか。」

「あなたは、げんきよく うたいますか。」

などの質問によって練習する。

(㉔) およいで いきました。

「およいで います」は一年下単元7 「こいのぼり」

に既出。「およぐ」の「くで いきます」「くで きま

す」形を練習する。

(㉕) 一頁ずつ生徒に朗読させ読み方の正しい指導をする。

(㉖) 話を四つくらいに分けて、生徒に話させ、記憶と理解をたためす。

まとめ

一、「どんな いろですか。」という質問の形は読本の本文には未提出のものであるが、色について質問する時に必要な形であるから、よほど生徒に抵抗のないかぎり、これをここで提出して、この質問の意味を理解させ、この質問を使って、示された色を正確にいいあてる練習をする。れいの色だけではなく、いろいろのものを示して言わせてみる。

二、動詞の前に数詞がくる形をもう一度復習させる。

三、新出文型「この ようです」をじゅうぶんに練習させる。一つのものについても生徒がそれを何のよう感じるかは異なるであろうから、一つのものについてもいろいろの答をさせるような練習もよいと思う。

四、副詞の復習と練習。「げんきよく」と「なかよく」以外にも、「おおせい」「つぎつぎに」「あちらこちら」「いっしょうけんめい」などあまり練習に取り入れられないで忘れかけているようなものもあろうから、この際復習をするのもよい。

また、「くるくる」「どすんど」「ふつつり」「ぽんど」「ちくりと」「すっぽり」などの凝声語、凝態語の練習などもあわせてしておく。

練習問題

(一)本の話にしたがって動詞を入れなさい。

○きせんが うみを

○きせんから れいが、ひとつ うみに

！。

○いるかが、れいを

○れいは、いるかの あたまに

○いるかは

○ほかの さかなは

○いるかは

○いるかは、げんきよく

(二)動詞を選んで結びなさい。

○えはがきが

○きました

○わたしの かばんが

○ありません

○いしが

○わたしの あたまに

○あたりました

○なつおさんは

○やきゆうが

○じょうずでした

(三) 適当な副詞をえらんでいれなさい。

ふつつり。すっぽり。ちくりと。ぽんと。どすんと。

おとうさんの ぼうしは、わたしの あたまに

はまりました。

くりは、ひばちの なかから はねました。

はちは、 なつおさんの てを さしまし

た。

つなを ひっぱりました。つなは、

した。

ぞうさんも くじらさんも ひっくりかえり

ました。

(四) ことばをいれなさい。

ほか | さかなは、いるか | ほめました。

「いるかさん、りっぱ | ね。おおさまの | です。」

| いいました。

わたしは、がっこう | あかい はな | れい | か

けて いきました。

いさむさん | いちろうさんは、ももいろ | れい |

かけて きました。

(五) 上の名詞のことばは、下のことばにつく時どうなりま

すか。

しろ ↓ ふね

みどりいろ ばす

ももいろ はな

あか
あお

じどうしゃ
うみ

単元6 したきりすずめ

一、指導の時期

五月。後半一週間半を当てる。

二、指導の時間数

本文指導	一課を約五時間
まとめ	一時間
練習問題	一時間
	計七時間

三、この単元の趣旨

日本のおとぎ話を各巻一つずつ採用することはすでに予定されていることですが、このたびは、「したきりすずめ」を選びました。おとぎ話は確かにその国の民俗習慣に密接に結びつき特徴のあるものですから、国情の理解という点でも価値があり、長い年月児童に親しまれて語り継がれてきたものだけに、国は異っても児童の共感を呼びやすいものではありません。しかし一面、これを語

って聞かせる親たちの教育的配慮のうえに、この物語の産まれた時代の道徳観念などがかなり影響して、現代の時代には受け入れられない、または違和を感じさせるような扱い方がされている場合も少くありません。例えば「仇討」思想などは日本の武家時代の美德でしたが現代社会では通用しませんし、「征伐」とは侵略に他ならぬとすれば、これにも問題があります。勸善懲惡精神の行き過ぎが極端に残酷陰湿なこらしめになったりするようなものの場合もあります。しかしこのような点がまた、おとぎ話を語るものにも聞くものにも共感とかっさいを博したところなのですからこれを切り捨ててしまうのでは、そのおとぎ話の生命が枯れてしまうおそれもあります。このような点をあれこれ配慮して、あまり極端でないものを選び、また物語の特徴や新鮮さ面白さをそこなわぬ程度に内容に変更や削除を行ったりしなければならぬことをあらかじめ含んでおいていただきたいと思えます。そして指導される教師の方々においても、生徒の理解力を斟酌のうえ、公正健全な立場でこの種の教材を取り扱われるようお願いいたします。「したきりすずめ」は、人間と動物との美しい交情を描いたものだという解釈をまず中心にして指導していただきたいのです。人間と動物を同等の世界の中の渾然一体のものとして感じ考えていた日本民族の動物観は、「したきりすずめ」だけでなく多くのおとぎ話の特長になっていますが、これ

を、まず生徒に感じ取らせることがこのおとぎ話の目的になります。「いじわるばあさん」がこっぴどく報復される「気味のよさ」というものにばかり生徒の興味が引きずられぬよう教師は指導を加減することが必要です。そういう意味から、舌を切られたすずめを讀本ではあまりもの哀れな状態で提出してありません。ばけものが出てくるくだりがあっさり処理してあるのも、絵が主であり、文のほうに従であるという事情以外に内容上の配慮があるわけです。

以上のようなことをご理解くださったうえで、この教材は、例の絵話形式で、讀本から学ぶよりも、生徒の興味を刺激して生徒に感想を述べさせたり、理解を發表させたりする日本語の積極的な応用練習の場として、大いに活用に工夫していただきたいと思えます。

四、学習指導の要点

○おじいさんのすずめに対する態度、おばあさんのすずめに対する態度、すずめの、おじいさん、おばあさんに示す反応をはっきり読み分けて理解させる。

○「どっちが いいですか」「このほうが いいです」の文型をじゅうぶん練習する。

○既習の「やります」「あげます」に対して「もらいます」の形が提出されるから、この語と「やる」「あげる」との関係を明確に覚えさせる。

○「さがしに いきました」「もらいに いきました」など「しに いきます」の形が再出、意味がかなり高度になっているから、生徒に消化しやすいよう例文や練習に工夫をする。

○重い、軽いを対照的に提示して練習させる。
○おじいさん、おばあさん、すずめのしたことを整理して自分のことばで発表できるように訓練する。

五、学習指導の展開

したきりすずめ (5348 ページ)

(本文)

おじいさんの うちに
すずめが きました。
おじいさんは、
すずめに
えさを やりました。
あるひ、
すずめは、
おばあさんの のりを
たべました。
おばあさんは
おこりました。
すずめの したを

(語句)

- ・すずめ
- ・えさ
- ・あるひ
- ・のり
- ・した
- ・(おやど)
- ・(どこだ)
- ・たけやぶ
- ・おどり
- ・つづら
- ・どっち
- ・(ちいさい) ほう
- ・かるい

きりました。
すずめは、
にげて いきました。
おじいさんは、
すずめを
さがしに いきまし
た。
「すずめ、すずめ、
おやどは どこだ。」
すずめの うちが、
たけやぶの なかに
ありました。
すずめは
げんきでした。
すずめは、
おじいさんに
たくさん ごちそうを
おどりも みせまし
た。
すずめは、
おおきい つづらと
ちいさい つづらを

- ・ もらい (ました)
 - ・ あけ (ました)
 - ・ おもい
 - ・ はいって (います)
 - ・ こわい
 - ・ ばけもの
- (文型・文法)
- ・ さがしに いきました
 - ・ もらいに いきました。
 - ・ げんきでした。
 - ・ ごちそうを しました。
 - ・ どっちが いいですか
 - ・ ちいさい ほうが いい
です
 - ・ はいって います
でて きました

もって きました。
「おじいさん、
どっちが いいです
か。」
と ききました。
「ちいさい ほうが
いいです。」
おじいさんは、
ちいさい かるい
つづらを
もらいました。
おじいさんは、
うちへ かえりまし
た。
うちで つづらを
あけました。
なかに、たからものが
たくさん ありまし
た。
おばあさんも、
つづらを
もらいに いきまし
た。

おばあさんは、
 おもい おおきな
 つづらを もらいまし
 た。
 おばあさんは、
 かんがえました。
 「おもい つづらです。
 たからものが、
 たくさん
 はいって います。」
 とちゅうで
 おばあさんは、
 つづらを あけまし
 た。
 こわい ばけものが、
 でて きました。

(ア)したきりすずめ

すずめ

最初「すずめ」を図示。あとで「したきりすずめ」はこの話に出てくるすずめのことであること、なぜ「したきりすずめ」というかを説明する。
 「すずめ」の発音が正しく言えるよう訓練する。
 すずめについて問答をする。

「ちいさい とりですか。」
 「すきですか。」
 「どこに いますか。」
 「なにを たべますか。」
 「とぶことが できますか。」
 「およぐことが できますか。」
 など。

(イ)えさ

とりやさかながたべている絵や写真で図示。

※「とりの えさ」「さかなの えさ」は普通いわれるが、動物について「ぶたの えさ」は言うが「いぬの えさ」「ねこの えさ」など、やたら動物には使わないから注意する。

「きんぎょに えさを やりますか。」

「(カナリヤ)に えさを やりますか。」

「すずめの えさは なんですか。」

などの質問で練習する。

(ウ)あるひ

単元2「らくだの みみ」で「あるとき」が既出。何月何日ときまった日ではない、何日かわからない日を指すのだということを理解させる。

「すずめは いつ のりを たべましたか。きのうでしたか。きょう ですか。」にちようびに たべましたか。「わかりません、あるひ、すずめは のりを

「たべました。」のように説明する。

(エ)のり

図示。また実物を示す。

「これは のりです。」

「この のりは たべることが できますか。」

「いいえ、たべることが できません。」

「けれども、すずめは のりを たべました。」

「すずめは かんがえました。「これは わたしの

ごちそうです。」

などのように説明する。「のり」は理解させただけでよいであろう。

(オ)おばあさんは おこりました。

「おこりました」は二年上単元6 「さると かに」に既出。おばあさんが、おこっている絵を見せて理解させる。

※生徒に力があれば、

「なぜ、おこりましたか。」

「すずめは、おばあさんの のりを たべましたか

ら。」

などの問答もできる。

(カ)した

教師が舌を出してみせる。

(キ)したを きりました

教師は、じぶんの舌を切るまねをしてみせる。

「すずめの みみ(あし、あたま、など)を きりま

したか。」

「すずめの なにを きりましたか。」

の質問で練習。

(ク)すずめは にげて いきました

「にげて いきました。」は二年上単元6 「さるとか

に」に既出。復習をする。

(ケ)さがしに いきました

「さがしました」は二年上単元1 「うさぎと かぜ」に既出のことばだがもう一度「かくしました(一年下

単元5 「いいすたあの たまご」 「かくれました(二

年上単元1 「うさぎと かぜ」 「みつめました(一

年下単元5 「いいすたあの たまご」などの語と関

係づけて復習と練習をする。

「さがしました」がじゅうぶん練習できたところで

「さがしに いきます」「さがしに きます」を練習

する。

「あおい とりを さがしに いきました。」

「おかあさんを さがしに いきました。」

「たからものを さがしに いきました。」

などの例文も数多く示す。

(コ)「すずめ、すずめ、おやどは どこだ。」

「すずめ、すずめ、あなたの うちはどこですか。」

という意味であることを説明する。

このことばは、文法的な説明や練習はせず意味を理解させたら、とくに言わせる練習までしなくてもよい。

(㉞) たけやぶ

絵または写真で図示。

「ハワイに ありますか。」

のような質問をしてみる。

(㉟) すずめは げんきでした。

「おげんきですか。」「おげんきで」(単元3 「えはが

き」) や「げんきよく」(単元5 「れいと いるか」)

の形は既出。

げんきな こどもです。

この こどもは げんきです。

この こどもは きノウ げんきでした。

のように提示する。「でした」については、

きれいでした。

しずかでした。

りっぱでした。

など、ほかの形容動詞の例も示す。

(㊀) ごちそうを しました

「ごちそうを つくりました(一年上単元5 「かんし

やさい)。」

「ごちそうを だしました。」

「ごちそうを もって きました。」

などは既出。これらを思い出させながら「ごちそうを

します」は、ごちそうを出して、お客に食べさせる意味であることを理解させる。

「おきやくさまが きました。ごちそうを します

か。」の質問を何人かの生徒にしてみる。

(㊁) おどり

絵、写真などで理解させる。

※西洋風のダンスと区別していることを注意する。

「おどりが できますか。」

「おどりを どこで しましたか。」

「おかあさんに みせましたか。」

などのような質問で練習する。

(㊂) つづら

図示。衣類などを入れておくものだということを絵に

よって分からせるようにする。これを使う練習はあま

りしなくてもよいが発音に注意して正しく言えるよう

にする。

「すずめは、おおきい つづらを もって きました

か。」

「すずめは、ちいさい つづらを もって きました

か。」

「すずめは、おおきい つづらと ちいさい つづら

を もって きましたか。」

「すずめは、なにを もって きましたか。」

などの質問で練習をする。

(メ)どっちが いいですか

○最初「いい」「いいです」(一年下単元6「しろいい
既出)の復習をして意味を覚えているかどうか確認す
る。

いい におい。 いい (よい) にんぎょう。

いい じどうしゃ。 いい せんせい。 など。

「この ほんは いいです。」

「この くだものが いいです。」

などの形を提示し、問答にいれて練習する。

○次に「どっちが」は二つあるものの一つを選ばせる質
問に使うことばであることを理解させるために、

「どっちが おおきい (ちいさい) ですか。」

「どっちが はやい (はやい) ですか。」

「どっちが あたらしい (ふるい) ですか。」

のような質問を二つずつ異った品物を用意して示しな
がら自問自答し、生徒にも質問して答えを誘導する。

また二つずつ品物を示して、

「どっちが いいですか。」

と質問して生徒の好きなほうを選ばせることで、この
質問の意味を理解させる。

※この質問の文の完全な形は「××と ○○と どっ
ちが いいですか。」になるが、生徒に余力があれば、
この形でも練習させる。

※「どっちが いいですか。」の「いい」の意味は厳

密には「好む」の意で「良い、善い」の意味ではない
が、そこまではっきり区別して教える必要はない。

(チ) (ちいさい) ほうが いいです

「どっちが ？ ですか。」

に対してどちらか一つえらぶ時、そのえらんだものを
挙げて「この ほうが ？ ですよ。」と答えるのである
ことを例文によって理解させる。

「ひこうきと じどうしゃと どっちが はやいす
か。」

「ひこうきの ほうが はやいです。」

「せんせいの ほんと あなたの ほんと どっちが
あたらしいですか。」

「わたしの ほんの ほうが あたらしいです。」

また、大小のりんごを示し、

「どっちが いいですか。」

「おおきい ほうが いいです。」

あかいくだものと、あおいくだものを示し、

「どっちが いいですか。」

「あかい ほうが いいです。」

など教師の自問自答、生徒との問答で練習する。

※読本には「ちいさいほう」という形容詞の形しか提
示されていないが「ひこうきの ほう」などの名詞の
形もいっしょに提示しておく。

(ツ) かるい

おもい
軽いものと重いものを用意して対照させながら理解させる。

「このほんはおもいです。」

「このほんはかるいです。」

「××さんはせんせいよりかるいです。」

「せんせいは××さんよりおもいです。」

「おもいこづつみです。」

「かるいこづつみです。」

「このいすのほうはかるいです。」

「このつくえのほうはおもいです。」

などの文の形を提示し、それぞれにつき問答練習をする。

(テ)ちいさい かるい つづら

形容詞が二つ重って名詞を形容する形は前単元に既出。復習をする。

「おおきい おもい ××」もいっしょに練習をする。

(ト)おじいさんは うちへ かえりました。

「おじいさんは すずめの うちへ きました。」

「おじいさんは ごちそうを たべました。」

「おじいさんは おどりを みました。」

「おじいさんは ちいさい かるい つづらを もら

いました。」

「それから おじいさんは かえりました。」

と順序を追って、ここで話をまとめ、生徒の理解を整理し、生徒にも、

「おじいさんは どうしましたか。」

「おじいさんは それから どうしましたか。」

の質問をして答えられるようにする。

(ハ)もらいました

「すずめは つづらを おじいさんに あげました。」

「おじいさんは つづらを すずめに もらいま

した。」

と二つ並べて提示して、差し出すものと受け取るもの

とで使う動詞が違うことを理解させる。

「せんせいは えんぴつを ××さんに あげまし

た。」

「××さんは……?」

と言いかけて生徒にあとを言わせて練習する。

※「あげる」と「やる」は使い分けはあるが、「もら

う」は人でも動物でも同じように使ってよいことも例

文で示す。

(ニ) (つづらを) あげました

教師が、はこ、ドア、本などを実際にあけて見せて、

「くを あげました。」

と提示し、「あける」の意味と、「どんなもの」を「あ

ける」かを理解させる。

※一年上単元8 「かぞえましょう」に「あいていま

す」の形で自動詞形が既出であるが、これはいわゆる「あく」の意味から少しずれているものであるから、自他動詞の区別を対照させて指導する必要はない。

「おじいさんは なにを あけましたか。」
「つづらを あけました。」

の問答で練習する。

(又) なかに たからものが たくさん ありました。

「たからもの」は一年下単元8「ももたろう」に既出。

「なかに なにが ありましたか。」

の質問に答えさせて練習する。この他、中にいろいろのものを入れて生徒に示し、

「なかに なにが ありますか。」

の質問で練習を行う。

(※) もらいに いきました

前出「もらいました」を思い出させながら既習の文型

「××を くに いきます。」の形をつくらせる。

「○○さん、せんせいの えんぴつを もらいたいですか。」

「はい、もらいたいです。」

「もらいに きて ください。」

「××さん、○○さんは なにを しましたか。」

「○○さんは えんぴつを もらいに いきました。」

「それから、○○さんは えんぴつを もらいまし

た。」

の形を質疑応答の場を作って練習をする。

くだものを

はなを

おかしを

もらいに いきました。

なども問答の中にまぜて練習する。

「おばあさんは、すずめの うちを さがしに いき

ましたか。」

「いいえ、おばあさんは、つづらを もらいに いき

ました。」

「おばあさんは、ちいさい かるい つづらを もら

いましたか。」

「いいえ、おばあさんは、おもい おおきな つづら

を もらいました。」

「おばあさんは、なにを もらいに いきましたか。」

「おもい おおきな つづらを もらいに いきまし

た。」

などの自問自答を示してから生徒に質問して練習する。

(ノ) おばあさんは かんがえました。

「かんがえました」は一年下、二年でも既出。

「おばあさんは かんがえました。」

なにを 考えましたか。」

と質問して次の、

(イ) おもい つづらです。たからものが、たくさん はい
って います。

の文章を生徒にいわせる。

「はいつて います。」

○まず「はいります」を「でます」と対照させて、教師
はドアから出たりはいったりする動作をやって見せる
ことで理解させる。

○次に「でて います」(二年上単元2「おつきさま」

既出)と「はいつて います」を 箱にももののはいつて
いる状態と、はこから物が出ている状態を見せながら
提示する。理解できたら、

○「おじいさんの ちいさい つづらに なにが はい
って いましたか。」

の質問をする。

「たからものが、たくさん はいって いました。」

の答えを生徒なんんかになにが答えさせたら、

「おばあさんの つづらにも たからものが はいっ
て いますか。」

と質問して生徒に考えさせる。

○また、中になにがはいつているかわからない、はこや
びんやかんを見せ、

「なにが はいって いますか。」

と質問して想像の品物の名をいわせ、

「××さんは かんがえました。」

「まるい はこです。ボールが はいっています。」

「○○さんは かんがえました。」

きれいな おおきい はこです。

にんぎょうが、はいつて います。」

などの例もたくさん示す。

(ヒ)とちゅうで

「おばあさんは、うちへ かえりましたか。」

「いいえ、とちゅうで つづらを あけました。」

「おばあさんは、うちで つづらを あけましたか。」

「いいえ、とちゅうで あけました。」

のように自問自答しながら説明し、読本の絵を観察さ
せる。

「いさむさんたちは がっこうへ きました。とちゅう
で ほんを ひろいました。」

「おじさんは ニューヨークへ いきます。とちゅう
で ハワイに きました。」

「こうえんへ きました。とちゅうで、おじさんの
じどうしゃを みました。」

の例も適当な絵を用意して見せながら提示し、これら
を問答に組み入れていろいろの動詞を使って練習す
る。

※食事の途中、電話の途中など時間的のものはここで
は混乱をさけて出さないようにする。

「がっこうで おくりものを もらいました。」

それから かえりました。

とちゅうで あなたは、おくりものを あげますか。」

「がっこうへ かばんを もって いきます。

とちゅうで かばんを あげますか」

などの質問をして練習する。

※生徒に余力があれば「とちゅうに しが ありました」の形も練習させる。

(フ)ばけもの

図示。

「ばけものを みましたか。」

「ばけものは すきですか。」

「ばけものは どこに いますか。」

「ばけものは なにを たべますか。」

などの質問で理解を確かめる。

(ヘ)こわい

さまぎまの、児童が「こわい」と思うものを挙げて、

またこわいものの絵を見せて、

「——は こわいです。」

「これは こわい ——です。」

と提示する。

こわい ばけもの。 おに。

こわい おばあさん。 せんせい。

「ふかは、こわい さかなです。 きんぎょは、こわく

は ありません。」

「らいおんは、こわいどうぶつです。 うさぎは こわくは ありません。」

などの形を提示し、これを質問に変えて練習させる。

「——と ××と どっちが こわいですか。」

「××の ほうが こわいです。」

の形の練習もする。

(ホ) でて きました

二年下単元2「おつきさま」に「でて いました」が既出。中から外へ出てくる意であることを絵などを見せながら理解させる。

「つきは、くもから でて きました。」

「さかなは、いわから でて きました。」

「かんがるうの あかちゃんは おかあさんの おなかから でて きました。」

などの例を示したのち、

「つづらから こわい ばけものが、でて きました。」

と読本の絵を示す。

(マ)以上、ことばの練習が済んだら、話の内容について質問する。絵ひとこまひとこまを観察させながら、読本に掲載の文章やことばだけでなく、既習のものを取り入れてさまぎまのことをいわせるような誘導質問をする。

(ニ)一こまずつ読ませ、読み方の練習をさせる。

(㉔) 一こまずつ話させ、話し方の指導をする。

(㉕) 登場人物の、おじいさん、おばあさん、すずめがそれぞれ何をしたか整理して話させる。この三人について感想をいわせる。

「おじいさんと おばあさんと どっちが すきですか。」

「なぜですか。」

「おばあさんは こわいですか。」

「すずめは おとなしいですか。」
などのように。

まとめ

(一) 二つのものを比較して一つを選ばせる質問として「どっちが いいですか」の形を理解させる。最初の過程としては生徒がこの質問を聞いて意味を理解し適当な答をすることを練習の目標とする。生徒に「どっちがいいですか」の質問をさせる練習は第二段階とする。「どっちが いいですか。」の質問に答えられるようになったら、

どっちが
おおきい (ちいさい) ですか。
はやい (おそい) ですか。
きれいですか。
じょうずですか。

などの質問をしても答えられるように練習する。

※ 「どっちで」「どっちへ」「どっちを」などの形にまで拡げることとも考えられるが、この段階では、そこまでは教えないほうがよいと思われる。

(二) 「どっちが いいですか」の質問に対しては、「〜ほうがいいです」の形で答えるというように一応訓練する。(通常会話では「ほう」をぬかした形も通用する場合がありますが、やはり正しい形として「〜ほうがいいです」を練習させるようにする。

形容詞の場合を最初まとめて練習し、この場合には「終止形+ほうが いいです」になることを会得させる。次に名詞につく形を教え、この場合には「××のほうが」と助詞の「の」が必要であることを例文と練習の間にのみこませる。

※ 「動詞終止形+ほうが いいです」までにはこの段階では拡げないほうがよいであろう。

「〜 ほうが いいです」がじゅうぶん練習できたら
「〜 ほうが かわいい (形容詞) です。」
「〜 ほうが すき (形容動詞) です。」
などの形にまで拡げて練習させる。

(三) 「見せる」「見る」「見える」の意味を明確に区別してつかまえさせる。練習には、「みる」と「みせる」「みる」と「みえる」を対照させながら問答すると効果がある。例えば、

「すずめは、おじいさんに おどりを みせました。」
「おじいさんは……？」

と主語をかえて、その下の文章をつけさせて動詞が
「みました」にならねばならぬことに注意させて練習
したり、また、

「せんせい は まどを みました。」

「なにが みえましたか。」

「きや そらが みえました。」

「××さん、この えを みて ください。」

「なにが みえますか。」

などの質問で、主語と動詞の関係に注意させながら答
えさせる。

(四) 形容詞、形容動詞が名詞の上に重なる形の復習。読本
の「ひろい [] みち」のように形容詞をひと
つつけた名詞を提示してもうひとつを考えてつけさせ
る練習をする。

練習問題

(一) 動詞を入れなさい。

おじいさんは、すずめに [] えさを

すずめは、おばあさんの [] のりを

おばあさんは、すずめの [] したを

すずめは、おじいさんに [] おどりを

ある。例えば、

おじいさんは、ちいさい つづらを []

おじいさんは、つづらを []
つづらから こわい ばけものが []

(二) どっちが いいですか。
うみと やま

ひこうきと きせん

かくれんぼと かけっこ

○どっちが はやいですか。
うさぎと かめ

じどうしゃと じてんしゃ

○どっちが たかいですか。
ふじさんと まうなけあ

あなたと せんせい

○どっちが おもいですか。
ぞうと うさぎ

おとうさんと あなた

(三) ことばを入れなさい。

すずめの うちには、 [] の なかに ありまし
た。

すずめは、おじいさんに [] を しました。

すずめは、おおきい と ちいさい
を もって きました。

つづらの なかに が、たくさん ありま
した。

つづらから こわい が でて きました。

(四) ことばを入れなさい。

○すずめは、おじいさんに ごちそうを だしまし
た。

○おじいさんは ごちそうを 。

○おじいさんは、すずめに えさを やりました。

すずめは、おじいさんから えさを

○すずめは、おじいさんに おどりを みせまし
た。

○おじいさんは、おどりを 。

教師用書 下ねん二 ほんごの ほん

一九六八年一月二十日 印刷
一九六八年二月一日 発行

編者

東京外国語大学教授
釘本久春

製作

日本出版貿易株式会社
東京都千代田区神田猿樂町一の三

印刷

凸版印刷株式会社
東京都台東区台東一の五

発行

ハワイ教育会
ハワイ州ホノルル市

HAWAII KYOIKU KAI

1714 Pali Highway
Honolulu, Hawaii 96813

(社団法人日本音楽著作権協会第四二二一〇一号承認済)

PRINTED IN JAPAN

121275

東京都千代田区霞が関3-2-2

文化庁文化部国語課

国立国語研究所



9000028762

東京都千代田区千代田 3-2-2

文化庁文化部国語課

45